貝塚市埋蔵文化財調査報告　第72集

新井・鳥羽北遺跡発掘調査概要３

2007.9.30

貝塚市教育委員会

はじめに

大阪府南部に位置する貝塚市は、南は和泉山脈に接し、北は大阪湾に面しており変化に富んだ自然環境が残されています。

新井・鳥羽北遺跡は、小瀬、半田、新井地区に広がる中世・近世の集落跡であります。遺跡範囲の大部分はユニチカ㈱貝塚工場にかかります。ユニチカ㈱と言えば、東京オリンピックバレーボール「東洋の魔女」を輩出したことで有名ですが、平成９年に操業を停止し工場跡地は新たな活用方法が計画され工場跡地の活用が進みつつあります。

今回店舗建設に続いて、店舗へのアクセス道路建設に伴う発掘調査を実施しました。店舗部分の発掘調査では、集落域の一部が明らかとなりました。今回の調査では集落に関連した区画溝等を発見し、集落域の範囲が明らかになりつつあります。

これらの成果は、本市ならびに周辺地域の歴史を明らかにするうえで、まことに有意義なことと考えています。

本調査報告書の刊行が、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位には多大なご協力を頂き、ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも本市における文化財保護行政に対する、一層のご理解とご支援をお願いいたします。

平成19年9月30日

貝塚市教育委員会

教育長　山本　太三郎

例　　言

1．本書は、小瀬175-1他地内（開発面積55,370㎡）に所在する新井・鳥羽北遺跡において実施した店舗建設工事に伴う道路建設工事の事前発掘調査の概要報告である。

2．発掘調査は確認調査を平成15年４月20日～４月26日、２次発掘調査を平成16年６月１日～平成16年８月４日にかけて実施した。なお内業調査については本書刊行をもって終了した。

3．調査にあたっては、ユニチカ株式会社ならびに株式会社橋本興業に多大な御理解と御協力を得た。ここに記して、感謝の意を表します。

4．発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課、学芸員三浦基が担当した。
内業調査および本書作成にかかる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。
岡本恵子、畑中道子

5．本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T．P．）を基準とした。

6．本書の土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』1993年度版を用いた。

7．本書の執筆は、三浦基、上野裕子、編集は三浦が行った。

8．遺物写真撮影は三浦が行った。

9．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

目　　次

はじめに

例　言

目　次　（本文目次、図版目次、挿図目次）

第１章　調査に至る経過 …… 1

第２章　位置と環境 …… 3

第３章　調査結果 …… 4

１．調査の概要 …… 4

２．基本層序 …… 4

３．検出遺構 …… 5
第１区 …… 5
第２区 …… 6
第３区 …… 13

４．出土遺物 …… 14

第４章　まとめ …… 20

図版目次

図版１　検出遺構
　　第１区全景
図版２　検出遺構
　　第２区全景
図版３　検出遺構
　１．第１区
　２．第１区　全景
図版４　検出遺構
　１．第１区
　２．第１区　SD-0011
図版５　検出遺構
　１．第２区　北半
　２．第２区　全景
図版６　検出遺構
　１．第２区　南半
　２．第２区　SD-0035
図版７　検出遺構
　１．第２区　SD-0027、SE-0037
　２．第２区　SD-0023
図版８　検出遺構
　１．第２区　SD-0033、SD-0034
　２．第２区　SD-0022
図版９　検出遺構
　１．第２区　SD-0034、SD-0035、Pit-0043、Pit-0044
　２．第２区　SD-0016～SD-0019
図版10　検出遺構
　１．第2区　SD-0023弥生土器出土状況(図版13-11)
　２．第２区　SD-0023弥生土器出土状況(図版12-8)
図版11　検出遺構
　１．第３区　全景
　２．第３区　SD-0038、Pit-0039、Pit-0040、SX-0046
図版12　出土遺物
　　SD-0023、SD-0027出土土器
図版13　出土遺物
　　SD-0016、SD-0020、SD-0023、SE-0037、石器
図版14　出土遺物
　　SD-0016、SD-0038、第3区第３層、青磁

挿図目次

図１　貝塚市位置図
図２　貝塚市遺跡分布図(部分)
図３　調査地位置図
図４　地区割図
図５　調査地柱状土層図
図６　SD－0011平・断面図
図７　遺構配置図
図８　第２区遺構配置図（北半）
図９　SD－0016、SD－0017、SD－0018、SD－0019、SD－0020、SD－0021、SD－0023、SD－0026平・断面図
図10　SD－0033、SD－0034 、SD－0035、SD－0036平・断面図
図11　ＳＥ－0037平・断面図
図12　SD－0041、SD－0042平・断面図
図13　SD－0023出土土器
図14　SE－0037出土土器
図15　ＳＤ－0011、ＳＤ－0016、ＳＤ－0017、ＳＤ－0019、ＳＤ－0020、ＳＤ－0021、ＳＤ－0022、ＳＤ－0027、ＳＤ－0035、ＳＤ－0038、Pit－0044、第3区第3層（35）、表採（18）出土土器
図16　SD－0011、SD－0016出土瓦
図17　石器

第１章　調査に至る経過

ユニチカ株式会社　代表取締役　大西音文から小瀬 175-1 他地内（開発面積 55,370㎡）で店舗建設に伴う駐車場、道路の計画がもちあがり、敷地が新井・鳥羽北遺跡の範囲にかかるため平成 14 年 8 月 27 日に発掘届出書が提出された。

発掘届出書の提出を受けて確認調査計画を作成し、平成 16 年 4 月 20 日～4 月 26 日確認調査を実施した。7 ヵ所で合計 397㎡の調査を実施した結果、古代～中世とみられる溝、柱穴等の遺構、遺物包含層が存在することが判明した。

この結果により、遺跡範囲が広がることが明らかとなり遺跡発見届出書の提出を求めた。また、開発工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ部分のうち店舗建設部分で既に発掘調査を実施している部分、工場基礎等により破壊を受けている部分を除き 3 ヵ所（第 1 区～第 3 区）、合計約 2,400㎡で発掘調査が必要という結果から、発掘調査の協議を行い、平成 16 年 5 月 28 日覚書を交わし、調査を実施した。

発掘調査期間は、平成 16 年 6 月 1 日～平成 16 年 8 月 4 日にかけてである。

内業調査は、平成 16 年 10 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日にかけて実施した。

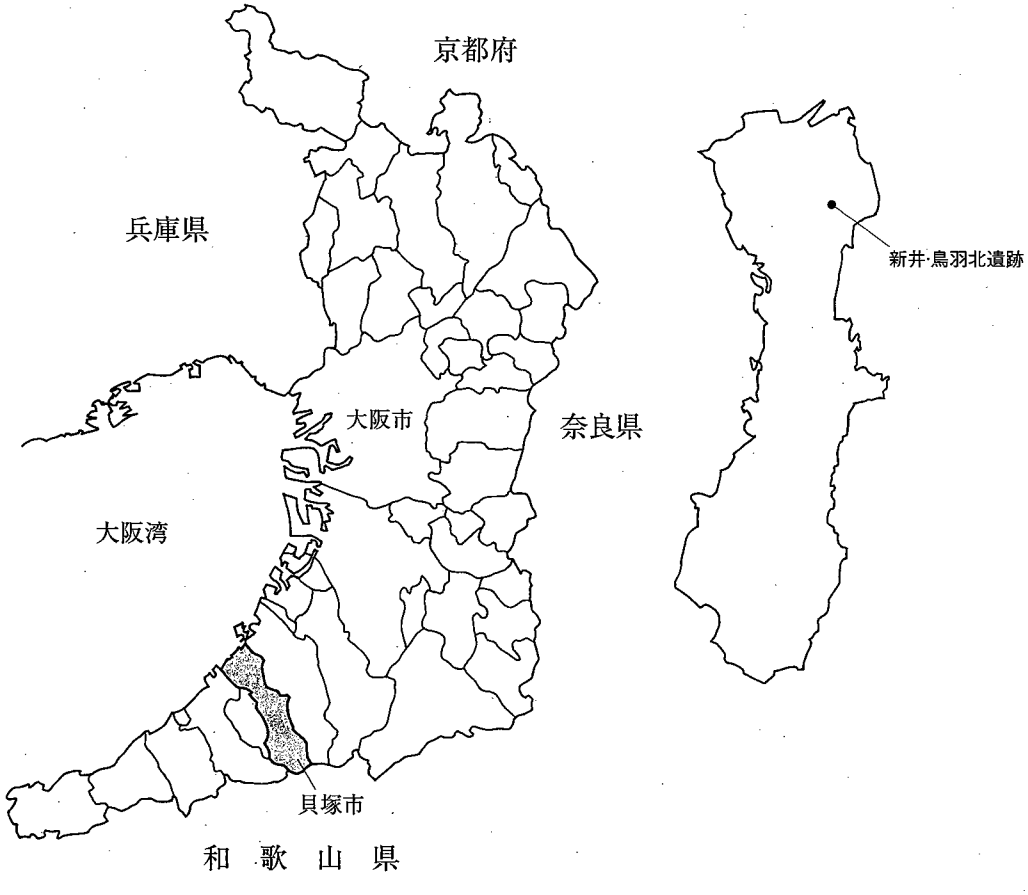
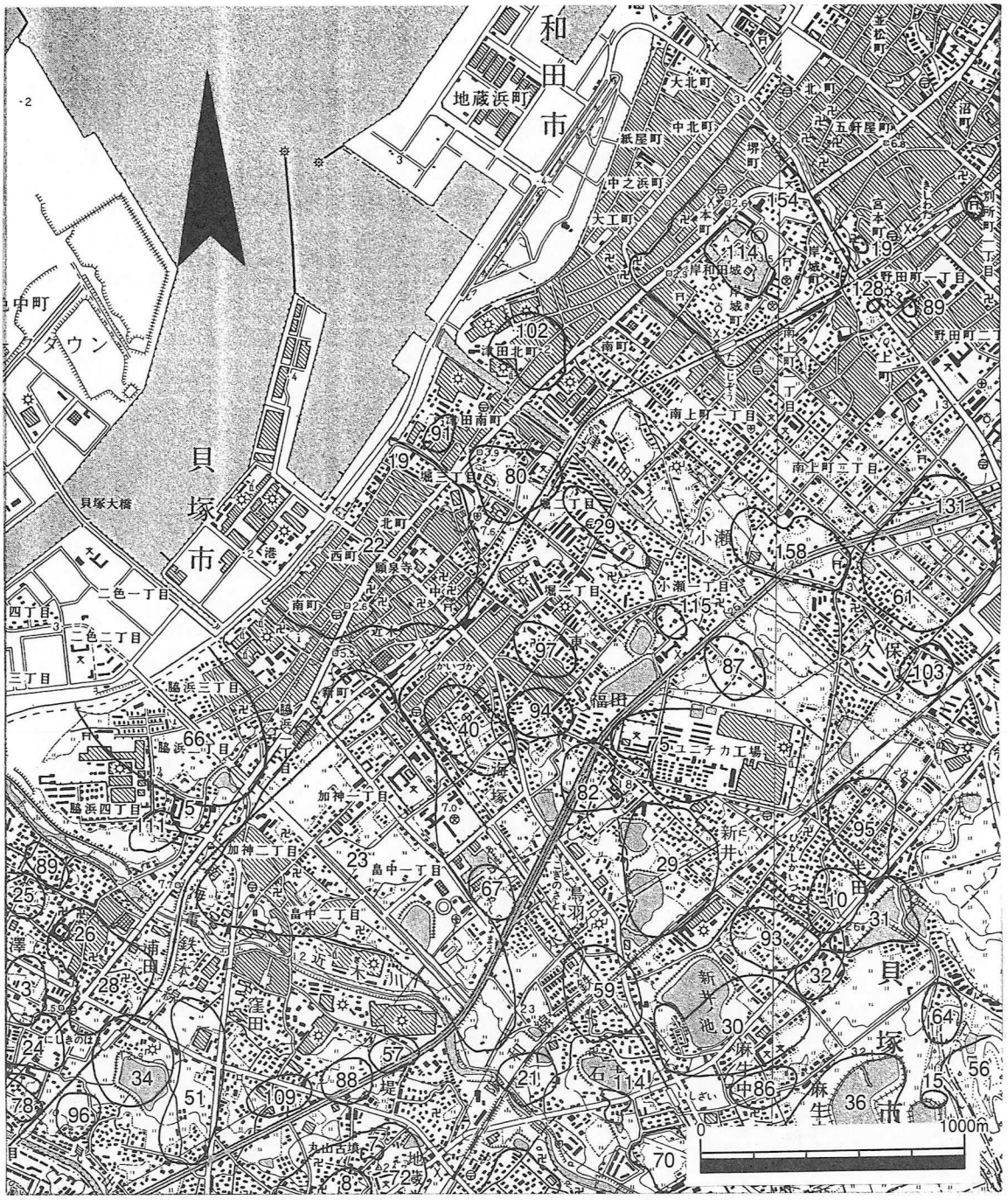


図１　貝塚市位置図



5 長楽寺跡　7（国史跡）地蔵堂丸山古墳　8 地蔵堂廃寺　10 秦廃寺　15 麻生中新池遺跡　19（貝塚）泉州麻生塩壺出土地　20 堀遺跡　21 橋本遺跡　22 貝塚寺内町遺跡　23 加治・神前・畠中遺跡　24 明楽寺跡　26 沢西出遺跡　28 沢城跡　29 新井・鳥羽遺跡　30 新井ノ池遺跡　31 半田遺跡　32 麻生中遺跡　34 澱池遺跡　35 積善寺城跡　36 清児遺跡　51 窪田遺跡・窪田廃寺　55 槍ヶ谷城跡　56 半田遺跡（清児地区）　57 堤遺跡　58 小瀬五所山遺跡　59 石才遺跡　61（貝塚）土生遺跡　64 海岸寺山遺跡　66 脇浜遺跡　67 今池遺跡　70 石才南遺跡　72 地蔵堂遺跡　75 新井・鳥羽北遺跡　80 津田遺跡　82 福田遺跡　86 麻生中出口遺跡　87 小瀬遺跡　88 堤三宅遺跡　89 沢新開遺跡　91 堀新遺跡　93 麻生中下代遺跡　94 堀秋毛遺跡　95 半田北遺跡　96 沢老ノ塚遺跡　97 東遺跡　102 津田北遺跡　103 久保遺跡　109 窪田ハマデ遺跡　110 海塚遺跡　111 脇浜川端遺跡　114 麻生中薬師堂遺跡　115 谷池遺跡

19（岸和田）宮本町遺跡　89 岸和田古城跡　114（府指定史跡）岸和田城　126 沼天神社遺跡　128 小寺遺跡　131（岸和田）土生遺跡　154 岸和田城遺跡

図２　貝塚市遺跡分布図（部分）

第２章　位置と環境

調査を実施したのは貝塚市北西部に位置し、半田、福田、新井にまたがる新井・鳥羽北遺跡である。

本遺跡は、貝塚市北部を流れる津田川左岸の段丘上に位置し、東西約 350 m、南北約 320 mの範囲に広がる中世から近世にかけての集落跡である。遺跡の範囲は大部分がユニチカ貝塚工場跡地の敷地にかかっており標高約 17 m～ 20 mである。

周辺に散在する遺跡としては、北に平安時代～中世の集落跡である小瀬遺跡や弥生時代～古墳時代初頭にかけての遺構を検出している土生遺跡、小瀬五所山遺跡、南に弥生時代～室町時代までの集落跡である新井・鳥羽遺跡、さらに南には、古代の渡来氏族秦氏の氏寺であった秦廃寺とその建立に関わった人たちの集落である麻生中下代遺跡や半田遺跡、半田北遺跡が広がっている。

これまでの発掘調査により調査地付近には、貝塚市清児周辺から半田、麻生中地域を抜けて流れ込む流路跡が確認されている。平成３年の発掘調査ではこの流路跡を検出しており、層中より縄文時代前期の石匙や弥生時代の抉入柱状片刃石斧が出土している。おそらく流路に近い場所に集落が築かれていた可能性がある。

調査地周辺では古墳時代～平安時代までの顕著な遺構は確認できていないが、中世には鋤溝等の耕作跡を検出しており、耕作地として開発されている様子が確認できる。耕作地としての利用は近世まで続き、半田村、福田村、新井村に近接した耕作地となっていた。やがて昭和９年に土地買収を受け、昭和９～ 10 年にかけて大日本紡績株式会社（後のユニチカ株式会社）貝塚工場が建設された。

調査地周辺は平成９年のユニチカ株式会社貝塚工場撤退により、跡地の開発が活発化している場所である。それに伴い発掘調査も増加しており、各時代の状況が理解されつつある地域である。

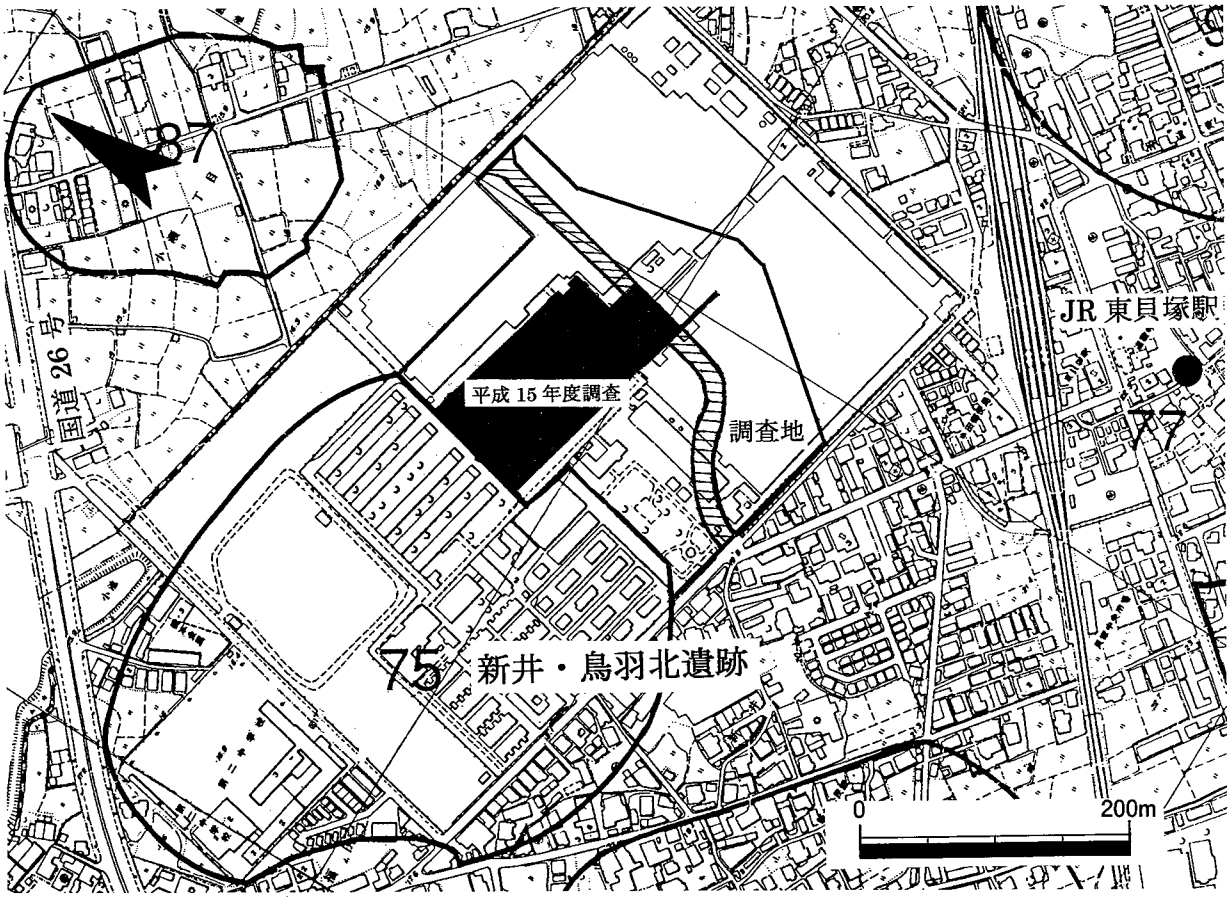


図３　調査地位置図

第３章　調査結果

１．調査の概要

調査は、開発道路工事により破壊を受ける部分(約2,400㎡)について調査区を設定した。調査区は３ヵ所となり、第１区～第３区とした。調査区は国家座標を基準にして10ｍ×10ｍの区画を設け、東西方向に17区画(Ａ～Ｑ)、南北方向に27区画（１～27）を設定した。

調査は、第１区は確認調査の結果から判断して確認調査における遺物包含層第３層、第４層を機械で掘削し、地山上面で遺構検出を実施した。

２．基本層序（図５）

第１区

本調査区の地層堆積状況は、上層より盛土（1、層厚１～1.6ｍ)、耕作土（2、層厚0.15～0.25ｍ)、旧耕作土（6、層厚0.15ｍ)、にぶい黄色細砂混じり土（3、層厚0.15ｍ)、褐灰色土（4、層厚0.1ｍ）でその下は明黄褐色土（5)、灰白色土（7）の地山である。３層（第３層）は、中世から近世の遺物包含層、４層（第４層）は中世の遺物包含層である。

第２区

本調査区の地層堆積状況は、上層より盛土（1、層厚0.4ｍ)、耕作土（2、層厚0.05～0.1ｍ)、黄褐色土（8、層厚0.15～0.25ｍ)、灰黄褐色土（9、層厚0.15ｍ)、褐色土（11、層厚0.05ｍ）で、その下はにぶい黄褐色土（10）の地山である。８層（第３層）は、中世から近世にかけての遺物包含層、９層、11層（第４層）は中世の遺物包含層である。

第３区

本調査区の地層堆積状況は、上層より盛土（1、層厚0.45ｍ)、耕作土（2、層厚0.05ｍ)、黄褐色土（12、層厚0.1ｍ）でその下は黄褐色土（13）の地山である。12層（第３層）は中世から近世の遺物包含層である。

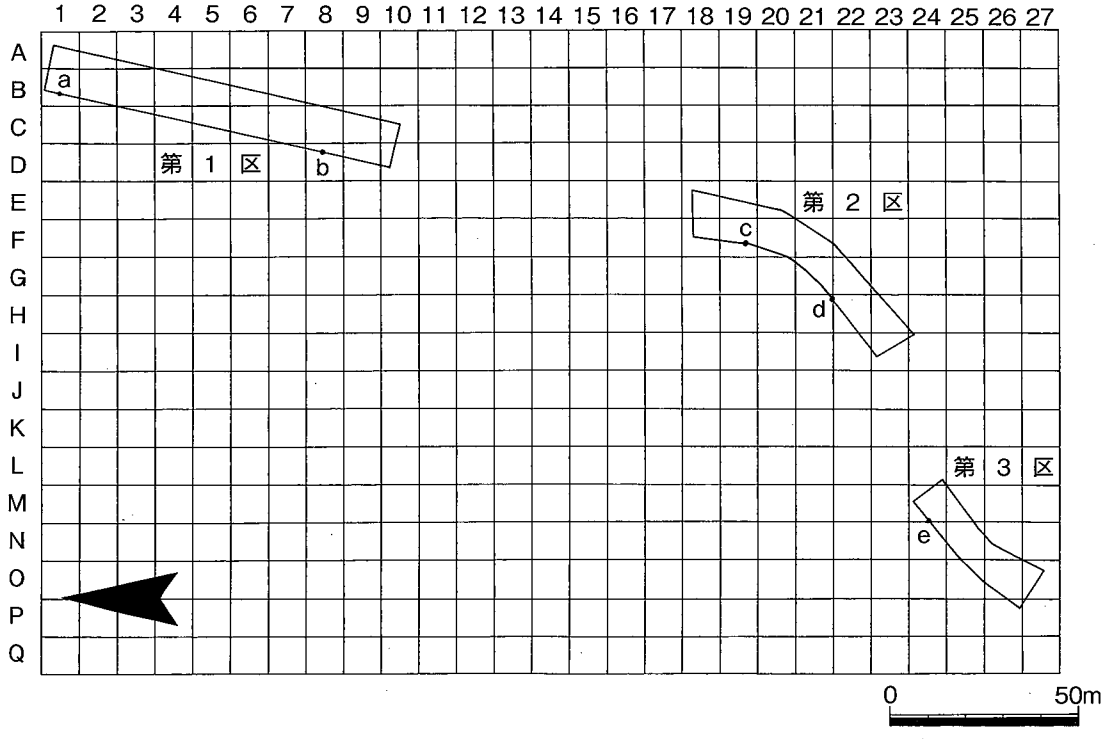


図４　地区割図

３．検出遺構（図６・７）

第１区

第１区は溝 14 条、土坑１基を検出した。埋土や遺構の形状などから流路および中世の耕作にともなうものと考えられる。

ＳＤ－０００１

本遺構は、Ｂ－１区にて検出した溝である。長さ 2.6 m、幅 0.55 m、深さ 0.06 ～ 0.09 mで埋土は褐灰色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－０００２

本遺構は、Ａ－1、Ｂ－１区にて検出した溝である。長さ 5.8 m、幅 4.1 m、深さ 0.01 ～ 0.09 mで埋土は褐灰色土である。遺物は出土していない。

ＳＸ－０００３

本遺構は、Ｂ－2、Ｂ－３区にて検出した溝である。長さ 1.8 m、幅 2 m、深さ 0.04 ～ 0.14 mで埋土は褐灰色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－０００４

本遺構は、Ｂ－３区にて検出した溝である。長さ 6.9 m、幅 3.9 m、深さ 0.03 ～ 0.07 mで埋土は褐灰色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－０００５

本遺構は、Ｂ－3、Ｂ－4、Ｃ－3、Ｃ－４区にて検出した溝である。長さ 7.6 m、幅 4.9 m、深さ 0.02 ～ 0.15 mで埋土は褐灰色土である。遺物は出土していない。

ＳＸ－０００６

本遺構は、Ｃ－５区にて検出した土坑である。長さ 2.6 m、幅 3.3 m、深さ 0.01 ～ 0.04 mで埋土は褐灰色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－０００７

本遺構は、Ｃ－５区にて検出した溝である。長さ 3.9 m、幅 1.4 m、深さ 0.02 ～ 0.06 mで埋土はにぶい黄色細砂混じり土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－０００８

本遺構は、Ｃ－５区にて検出した溝である。長さ 4.1 m、幅１m、深さ 0.01 ～0.05 mで埋土はにぶい黄色細砂混じり土である。遺物は出土していない。

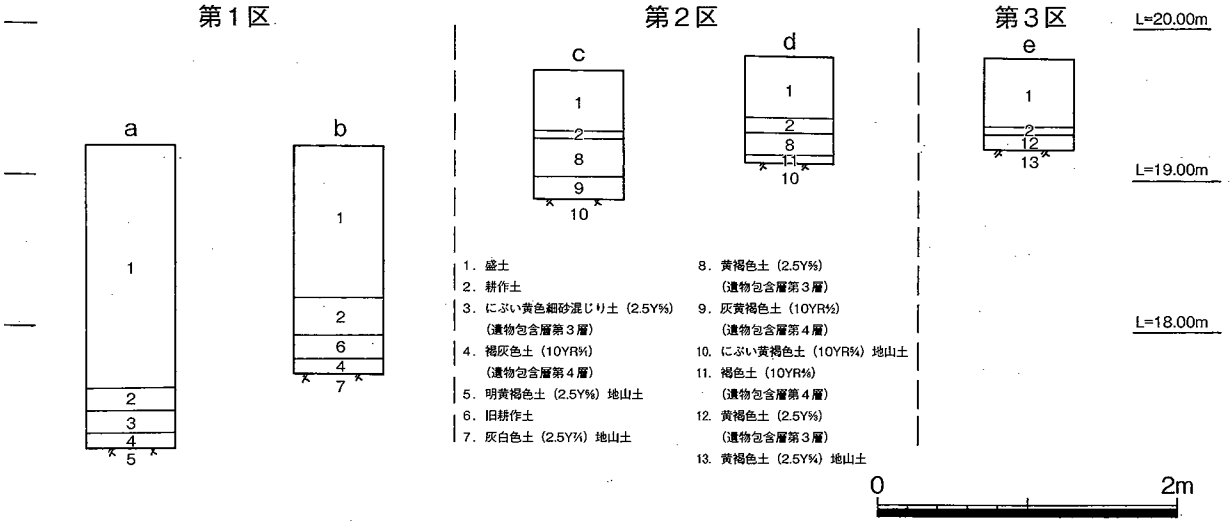


図５　調査地柱状土層

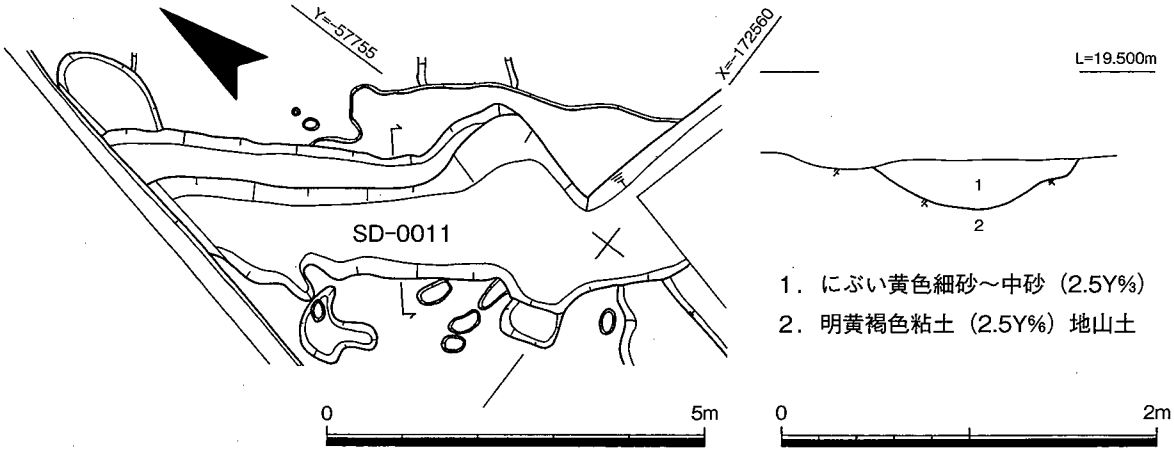


図６　SD－0011 平・断面図

ＳＤ－０００９

本遺構は、Ｃ－５、Ｃ－６区にて検出した溝である。長さ 3.7 m、幅 1.4 m、深さ 0.02 ～ 0.03 mで埋土はにぶい黄色細砂混じり土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－００１０

本遺構は、Ｃ－５、Ｃ－６区にて検出した溝である。検出長４m、幅 0.5 m、深さ 0.16 ～ 0.18 mで埋土は明黄褐色粘土、にぶい黄色細砂混じり土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－００１１

本遺構は、Ｃ－６、Ｃ－７区にて検出した溝である。長さ 6.3 m、幅 2.9 m、深さ 0.18 ～ 0.29 mで埋土はにぶい黄色細砂混じり土である。遺物は青磁碗、瓦が出土している。

ＳＤ－００１２

本遺構は、Ｃ－６、Ｃ－７区にて検出した溝である。長さ 3.2 m、幅 1.8 m、深さ 0.05 ～ 0.14 mで埋土はにぶい黄色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－００１３

本遺構は、Ｃ－７、Ｃ－８、Ｄ－８区にて検出した溝である。長さ 7.9 m、1.9 m、0.05 ～ 0.11 mで埋土はにぶい黄色細砂混じり土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－００１４

本遺構は、Ｃ－７、Ｃ－８区にて検出した溝である。長さ 2.5 m、幅 0.6 m、深さ 0.04 ～ 0.05 mで埋土は耕作土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－００１５

本遺構は、Ｃ－７区にて検出した溝である。長さ 2.7 m、幅 0.55 m、深さ 0.06 ～ 0.07 mで埋土はにぶい黄色細砂混じり土である。遺物は出土していない。

第２区

第２区では溝、鋤溝、井戸、柱穴などを検出した。柱穴は直径 0.3 m～ 0.4 mを測り、建物を復元するには至らなかったが、その周囲に直角に屈曲する区画溝と思われる溝を検出しており、屋敷地が拡がっていた可能性を示唆する。また、北側にも屈曲する区画溝を検出した。2003 年度に行った調査区北側の調査においても建物跡を検出しており、屋敷地がさらに南に広がっていることが確認された。

また、調査区中央に広がる自然流路は従前の調査で検出しているものと同一と考えられるが、流路内堆積層中から弥生土器が出土しており、残存状態の良さから、周辺における弥生時代の集落の存在を示唆するものとして重要である。

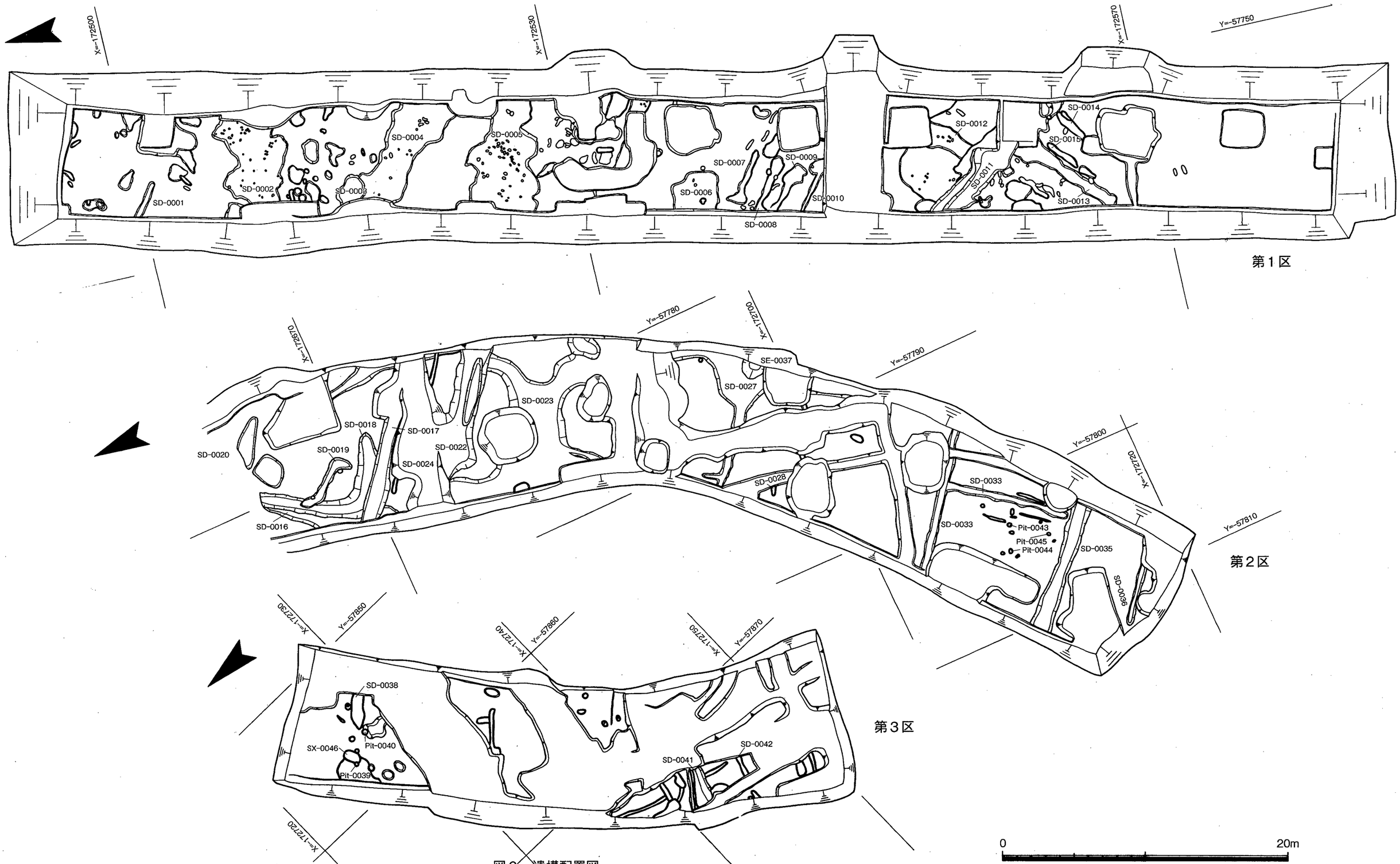

X=-172500
X=-172530
X=-172570
Y=-57750
SD-0001
SD-0002
SD-0003
SD-0004
SD-0005
SD-0006
SD-0007
SD-0008
SD-0009
SD-0010
SD-0011
SD-0012
SD-0013
SD-0014
SD-0015
第1区
X=-172610
Y=-57780
X=-172700
Y=-57790
SE-0037
SD-0027
SD-0023
SD-0018
SD-0017
SD-0020
SD-0019
SD-0022
SD-0024
SD-0016
SD-0028
Y=-57800
X=-172720
SD-0033
Pit-0043
Pit-0045
Pit-0044
SD-0035
SD-0036
Y=-57810
第2区
X=-172790
Y=-57850
X=-172740
Y=-57860
X=-172750
Y=-57870
SD-0038
Pit-0040
SX-0046
Pit-0039
SD-0041
SD-0042
第3区
X=-172720
0
20m

図6　遺構配置図

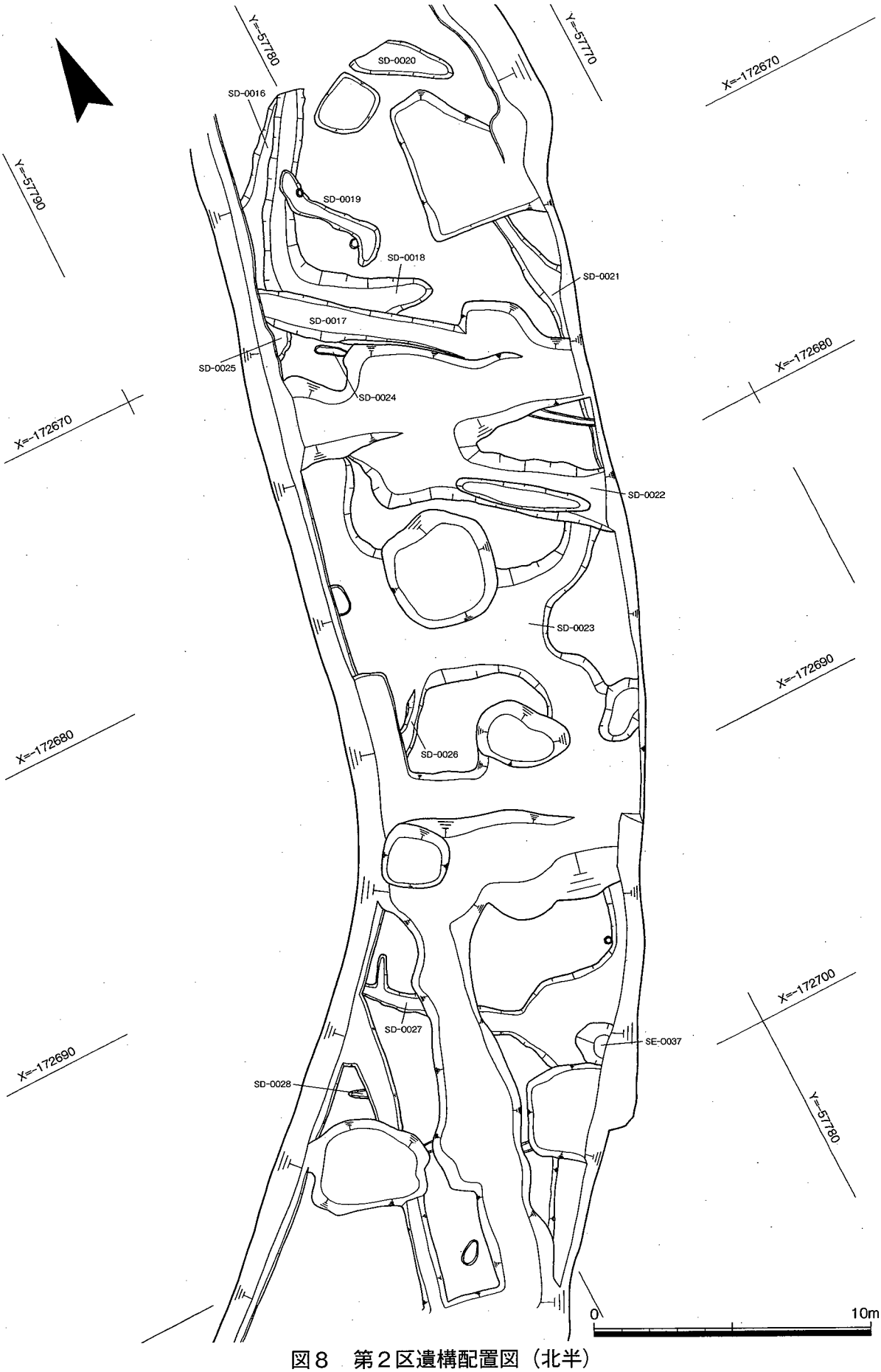


図８　第２区遺構配置図（北半）

ＳＤ－００１６

本遺構は、F－18区にて検出した溝である。長さ7m、幅0.9m、深さ0.05～0.09mで埋土はである。遺物は瓦、瓦器、土師質羽釜、瓦質土器、東播系須恵器こね鉢が出土している。

ＳＤ－００１７

遺構は、E－19、F－18、F－19区にて検出した溝である。長さ7.4m、幅1.4m、深さ0.23～0.37mで埋土は灰黄褐色砂混じり土、黒褐色土である。遺物は弥生土器、土師質羽釜が出土している。

ＳＤ－００１８

本遺構は、E－19、F－18、F－19区にて検出した溝である。長さ13m、幅1.5m、深さ0.07～0.32mで埋土は褐灰色土、灰黄褐色砂質土、黒褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－００１９

本遺構は、E－18、F－18区にて検出した溝である。長さ4.5m、幅1.5m、深さ0.06～0.24mで埋土は、黄褐色細砂混じり土、にぶい黄褐色細砂混じり土、暗灰黄色細砂混じり土である。遺物は須恵器、土師質土器、瓦器皿が出土している。

ＳＤ－００２０

本遺構は、E－18区にて検出した溝である。長さ3.7m、幅1.2m、深さ0.1～0.26mで埋土は灰黄褐色砂混じり土である。遺物は須恵器、土師質土器、瓦質土器が出土している。

ＳＤ－００２１

本遺構は、E－19区にて検出した溝である。長さ4.9m、幅1.3m、深さ0.08～0.22mで埋土はにぶい黄褐色砂混じり土である。遺物は弥生土器、土師質土器が出土している。

ＳＤ－００２２

本遺構は、E－19、E－20、F－19区にて検出した溝である。長さ9.9m、幅2.8m、深さ0.26～0.64mで埋土は黄褐色砂礫である。遺物は瓦、肥前系磁器碗、肥前系磁器皿、土師質土器、須恵器、青磁が出土している。

ＳＤ－００２３

本遺構は、E－20、F－20区にて検出した自然流路と考えられる。埋土は黒褐色土でほぼ東西方向に流れていたと考えられ、検出幅3m、深さ1.5m以上である。遺物は弥生土器壺、甕、土師質土器が出土している。

ＳＤ－００２４

本遺構は、F－19区にて検出した溝である。長さ1.1m、幅0.3m、深さ0.02～0.05mで埋土は暗灰黄色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－００２５

本遺構は、F－19区にて検出した溝である。長さ1.1m、幅0.6m、深さ0.07mで埋土は暗灰黄色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－００２６

本遺構は、F－20区にて検出した溝である。長さ2.6m、幅0.6m、深さ0.16～0.23mで埋土は黒褐色砂質土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－００２７

本遺構は、G－21区にて検出した溝である。長さ2.2m、幅1.7m、深さ0.8～1mで埋土は灰黄褐色砂質土である。遺物は土師質土器、サヌカイト剝片が出土している。

ＳＤ－００２８

本遺構は、G－21区にて検出した溝である。長さ0.65m、深さ0.3～1.06mで埋土はで灰黄褐色土ある。遺物は出土していない。

ＳＤ－００３３

本遺構は、G－22、H－22区にて検出した溝である。長さ9.8m、幅0.7m、深さ0.11～0.21mで埋土は灰黄褐色土である。遺物は瓦器、瓦質土器、土師質土器が出土している。

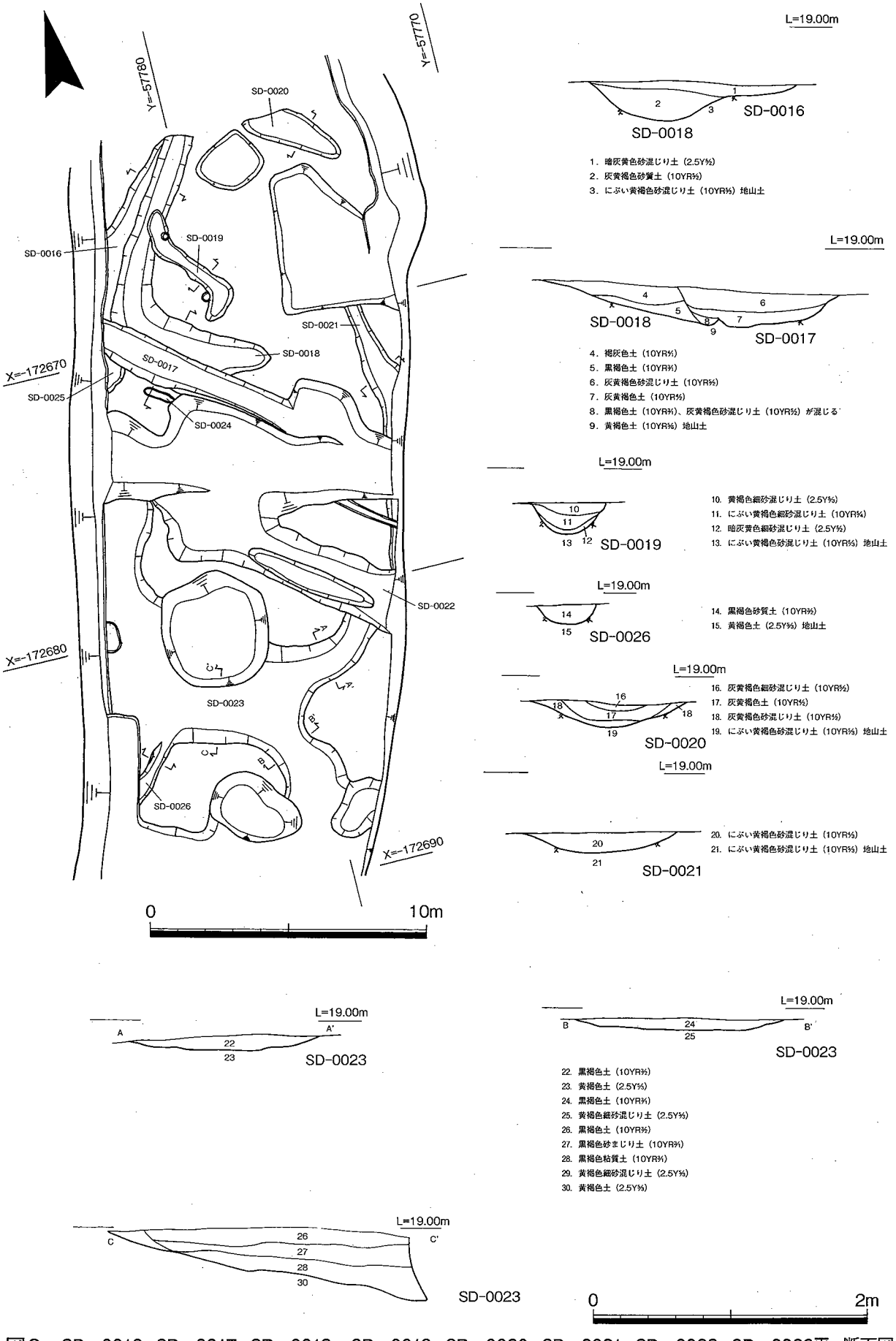


図9　SD−0016、SD−0017、SD−0018、SD−0019、SD−0020、SD−0021、SD−0023、SD−0026平・断面図

ＳＤ－００３４

本遺構は、Ｇ－22、Ｈ－22、Ｈ－23区にて検出した溝である。長さ8.7ｍ、幅0.7ｍ、0.04～0.14ｍで埋土は黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－００３５

本遺構は、Ｈ－22、Ｈ－23、Ｉ－22、Ｉ－23区にて検出した溝である。長さ9ｍ、幅1.6ｍ、深さ0.11～0.23ｍで埋土はオリーブ褐色土である。遺物は土師質土器、瓦器、青磁碗が出土している。

ＳＤ－００３６

本遺構は、Ｈ－23、Ｉ－23区にて検出した溝である。長さ4.3ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.16～0.18ｍで埋土は灰黄褐色土である。遺物は出土していない。

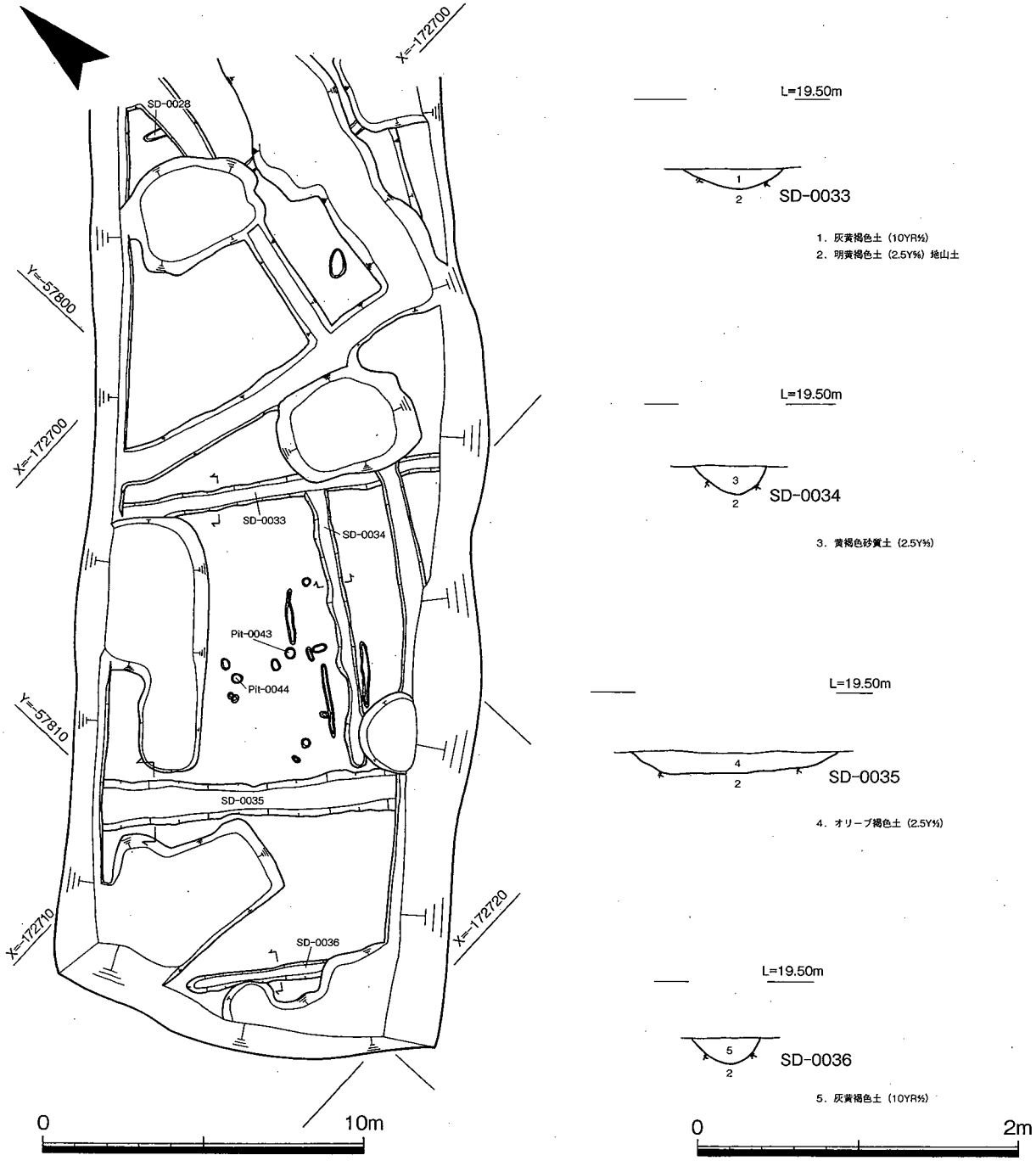


図10　SD－0033、SD－0034、SD－0035、SD－0036平・断面図

ＳＥ－００３７

本遺構は、Ｆ－21区にて検出した井戸である。長さ1.1ｍ、幅1.5ｍ、深さ0.72ｍで埋土は灰黄色砂混じり土、灰黄色粘土、灰黄色粗砂混じり土、褐灰色粘土砂混じり土である。埋没した自然流路部分を掘削したもので、素掘りの井戸である。遺物は瓦器、土師質土器が出土しており、中世に掘削されたと考えられる。

Ｐｉｔ－００４３

本遺構は、Ｈ－22区にて検出した柱穴である。直径0.4ｍ、深さ0.03ｍで埋土は褐色土である。遺物は須恵器が出土している。

Ｐｉｔ－００４４

本遺構は、Ｈ－22区にて検出した柱穴である。直径0.35ｍ、深さ0.05ｍで埋土は褐色土である。遺物は瓦器が出土している。

Ｐｉｔ－００４５

本遺構は、Ｈ－23区にて検出した柱穴である。直径0.25ｍ、深さ0.05ｍで埋土は褐色土である。遺物は土師質土器が出土している。

第３区

第３区では溝、土坑、柱穴を検出した。柱穴は第２区と同じく集落に伴うものと考えられる。

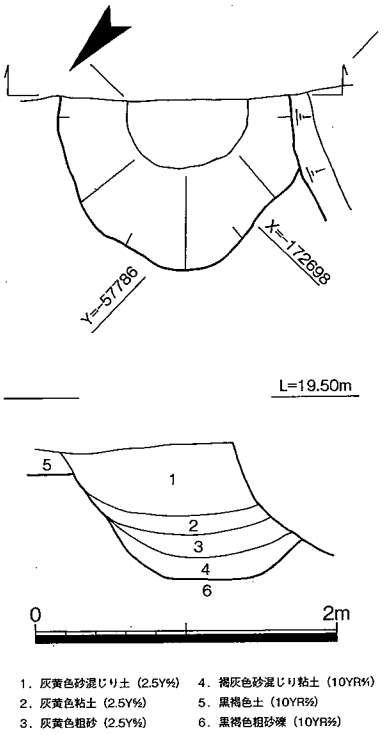


図11　ＳＥ－0037平・断面図

ＳＤ－００３８

本遺構は、Ｍ－24区にて検出した溝である。長さ2.4ｍ、幅1ｍ、深さ0.07～0.16ｍで埋土は黄褐色土である。遺物は瓦質土器火鉢が出土している。

Ｐｉｔ－００３９

本遺構は、Ｍ－24区にて検出した柱穴である。直径0.3ｍ、深さ0.12ｍで埋土は黄褐色土である。遺物は土師質土器が出土している。

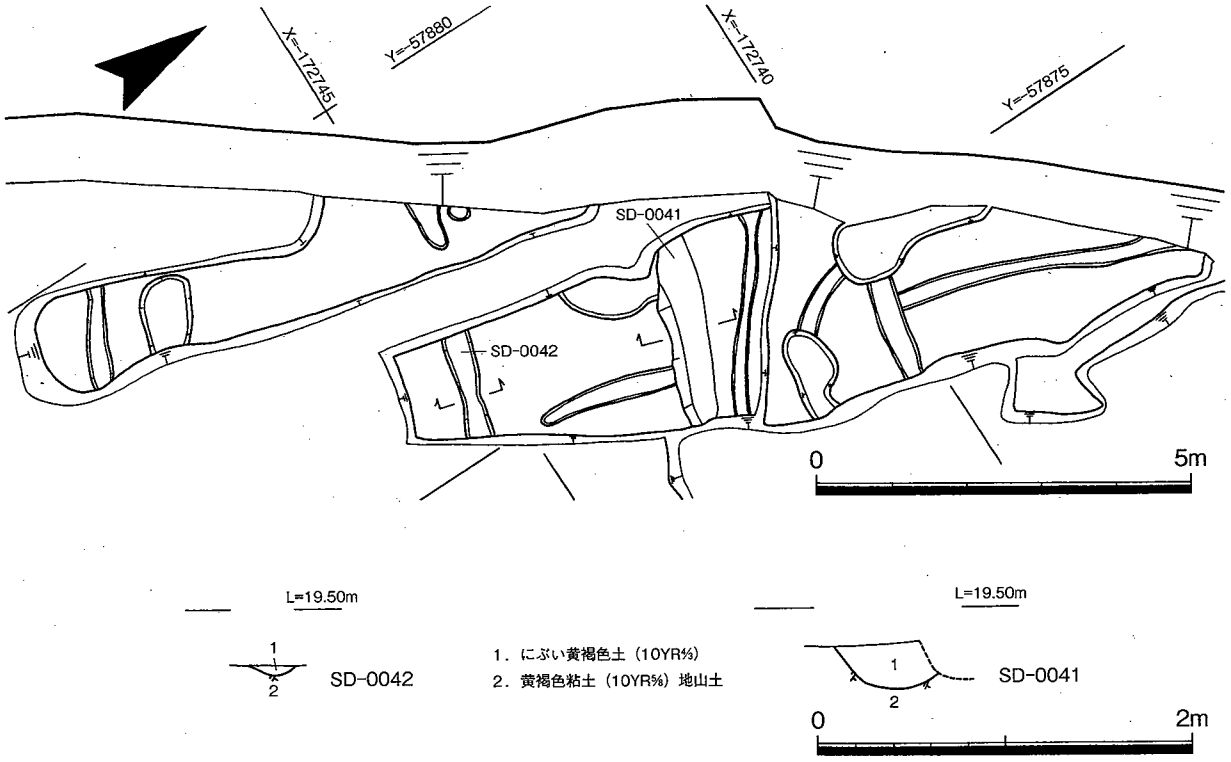


図12　ＳＤ－0041、ＳＤ－0042平・断面図

Ｐｉｔ－００４０

本遺構は、Ｍ－24区にて検出した柱穴である。直径0.4ｍ、深さ0.01ｍで埋土は黄褐色土である。遺物は瓦器が出土している。

ＳＤ－００４１

本遺構は、Ｏ－26区にて検出した溝である。長さ1.7ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.23～0.26ｍで埋土はにぶい黄褐色土である。遺物は土師質土器が出土している。

ＳＤ－００４２

本遺構は、Ｏ－26区にて検出した溝である。長さ1.4ｍ、幅0.4ｍ、深さ0.08～0.11ｍで埋土はにぶい黄褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＸ－００４６

本遺構は、Ｍ－24区にて検出した土坑である。長さ1.3ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.12ｍで埋土は黄褐色土である。遺物は出土していない。

４．出土遺物（図13～17、図版12～15）

遺物は全体量としてコンテナ５箱分が出土した。多くは瓦器、瓦質土器、土師質土器などの中世のもので、近世の陶磁器類も確認できる。これは調査地が中世以降に開発が活発化していたことを物語る。そのなかで特筆すべき遺物として、弥生土器が自然流路などから出土している。これらは残存状態も非常によく、全体像を復元できるものも含まれている。文様や形態などから弥生時代中期に位置づけられる。このことにより周辺に弥生時代中期の集落が営まれている可能性が高くなり、市内における弥生時代の集落動向を復元できる重要な資料となった。以下、遺物について詳述する。

図13－１～６、８～12はSD－0023から出土した弥生土器である。

１、２は甕口縁部である。いずれも口縁端部はつまみ上げ、肥厚させている。摩滅により内外面の調整は不明である。１は口径の計測不可、２は復元口径21.4cm、残存高4.0cmを測る。

３～６は底部で３が甕底部、４、５は壺底部、６は壺か甕の底部である。底径4.7～5.5cm、残存高3.0～5.6cmで、４は底径の規模が少し大きく、中期でも早い段階になる可能性がある。内外面の調整については、５が外面に縦方向のケズリ、内面に斜めハケを入れていることが確認できるほかは摩滅により不明である。

８は広口壺で口径19.4cm、胴部最大径23.4cm、残存高28.8cmを測る。外面頸部から胴部上半にかけて櫛描直線文、胴部下半にミガキを施す。口縁端部は上下に肥厚させ、端部内面には青海波状の櫛描きを施している。中期でも古い時期のものでⅡ様式まで遡る可能性もあるものである。

９は広口壺上半部である。口径14cm、残存高14.9cmに復元できる。頸部から胴部中央まで櫛描直線文を施し、内面にはわずかにハケメが確認できる。口縁端部は下方に肥厚させて垂下させている。

10は広口壺下半部である。底径7.6cm、残存高14.2cmに復元できる。外面には縦方向のミガキを施す。内面は摩滅により調整不明である。

11は広口壺である。口径23.6cm、胴部最大幅26.4cmに復元でき、残存高は34.3cmを測る。外面頸部から胴部上半にかけて櫛描直線文、胴部下半に櫛描波状文を施す。口縁部は有段口縁で、外面に櫛描波状文を施している。内面は斜めもしくは横方向のケズリを入れている。Ⅲ－３期（中期中葉）に位置づけられる。

12は甕で、口径27.6cmに復元でき、残存高26.9cmを測る。口縁は外反して、端部は面を持つ。外面はタテハケ後斜めハケ、内面は斜めハケを施す。11と同じ中期中葉に位置づけられる。

図13－７はSD－0023から出土した土師質土錘である。長さ7.9cm、幅6.6cmを測る。外面には指頭圧痕を多数残す。両面より穿孔している。

図14－13～15はSE－0037より出土した瓦器椀である。口径は15.5～16.5cm、器高は5.4～5.6cmの範囲内におさまる。高台は貼付高台で、底径は4.5～5.0cmの範囲内におさまる。内面には横方向の暗文、見込み面には斜格子の暗文が施される。

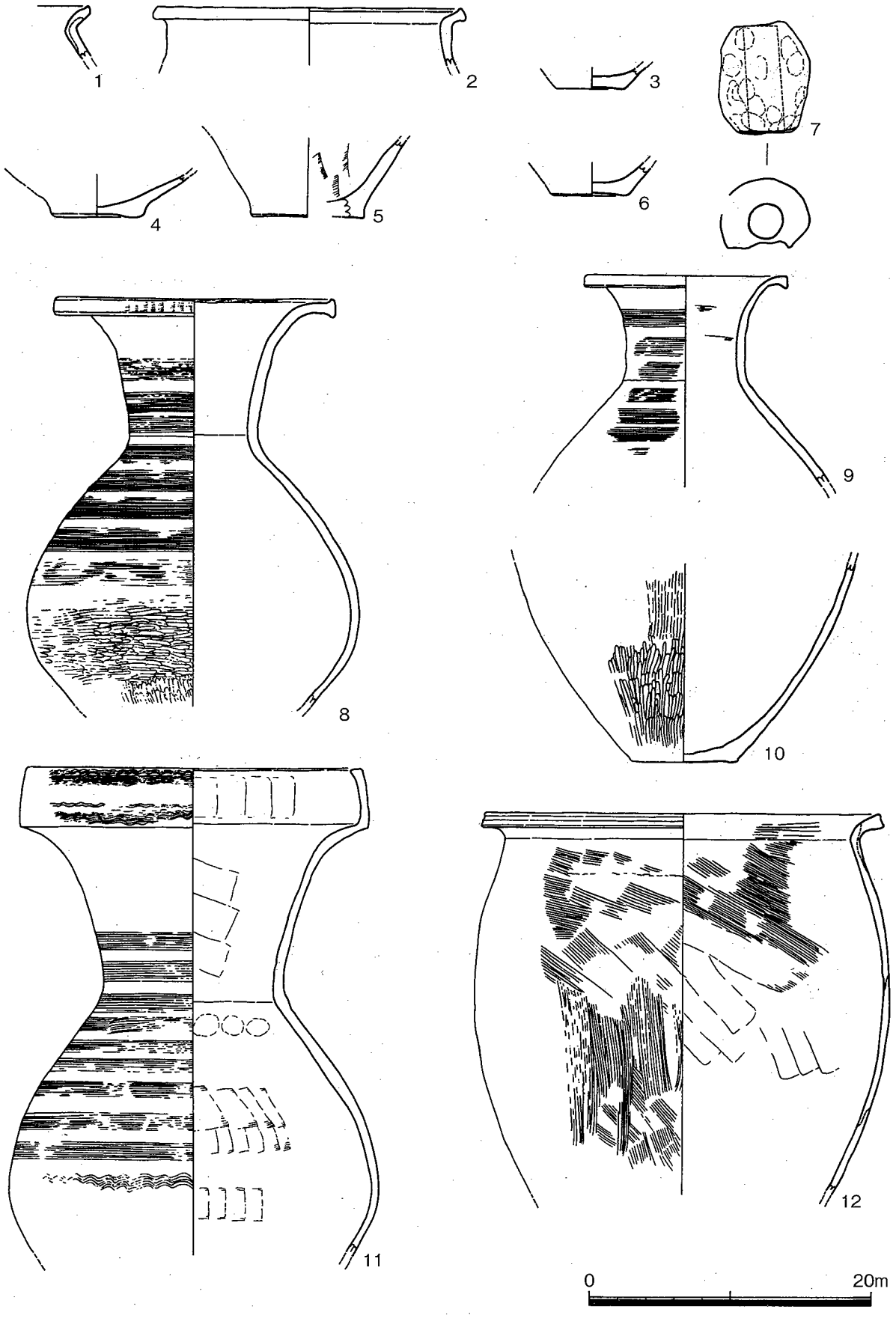


図13　SD－0023出土土器

瓦器椀は外面にミガキを残すこと、器高が5.4～5.6cmと比較的高いことから、勝浦康守氏の編年においてⅢ期の早い段階に位置づけられる（註１）。図15－16～18は青磁碗である。

16はSD－0011より出土した龍泉窯系青磁碗である。口径は復元不可、残存高2.4cmである。17はSD－0035より出土した越州窯系青磁碗である。口径復元不可、残存高2.3cmである。18は包含層出土の龍泉窯系の青磁碗である。口径14.1cmに復元でき、残存高3.2cmを測る。

図15－19、20は弥生土器の壺底部である。19はSD－0020より出土し、復元底径5.4cm、残存高3.3cmを測る。20はSD－0027より出土し、底径6.2cm、残存高3.4cmを測る。

図15－21はSD－0016から出土した瓦器小皿である。口径9.6cmに復元でき、残存高2.2cmを測る　内面には横方向の暗文が見られる。

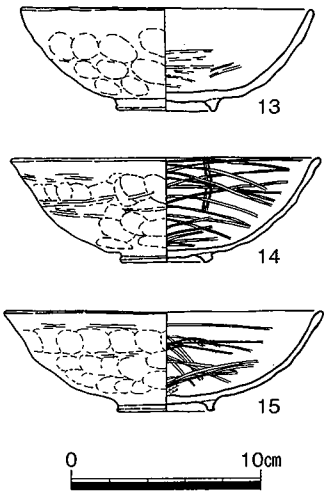


図14　SE－0037出土土器

図15－22はPit－0044から出土した瓦器椀である。口径13.2cm、器高3.1cm、底径2.5cmを測る。高台は高さ0.2cmと低く、痕跡を残すのみである。内面には横方向の暗文が見られる。

図15－23はSD－0019から出土した瓦器小皿である。口径10.0cmに復元でき、残存高1.8cmを測る。

図15－24はSD－0022から出土した肥前磁器皿である。口径13.6cmに復元でき、器高3.2cm、底径8.1cmを測る。18世紀前半のもの。

図15－25はSD－0016より出土した東播系須恵器の鉢である。口縁端部は肥厚するが拡張度は弱い。13世紀代に位置づけられる。

図15－26はSD－0038より出土した瓦質火鉢である。低い器高に猫脚状の脚部がつく形状のもので、残存高5.0cmを測る。

図15－27はSD－0021より出土した弥生土器の壺底部である。底径6.4cmに復元でき、残存高2.8cmを測る。内外面の調整は摩滅により不明である。底部の規模から中期前半に位置づけられる可能性が高い。

図15－28はSD－0022より出土した肥前磁器碗である。底径4.2cm、残存高2.7cmを測る。

図15－29、31～34は土師質羽釜である。

29はSD－0016より出土したもので、口径15.8cm、残存高2.8cmを測る。口縁はゆるやかに外反し、端部を肥厚させている。内面には板ナデを施す。

31、34はSD－0017より出土したもので、口縁は外反し、端部はナデにより断面四角形に仕上げる。31は口径27.4cm、残存高5.1cm、34は口径30.4cm、残存高6.4cmを測る。外面には横方向の板ナデ、内面に斜めハケを施す。

32、33はSD－0016より出土したもので、口縁部を短く外反させて丸くおさめる形状のものである。口径24.2～30.4cm、残存高4.2～6.4cmを測る。外面にヨコナデを施した後、鍔を貼り付ける。内面は斜めハケもしくは板ナデを施す。

これらの羽釜はいずれも口縁部が外反する形状で口縁部の高さも比較的高い。胎土は密であることから勝浦康守氏の編年でⅢ期に位置づけられるものである。

図15－30はSD－0020より出土した弥生土器甕口縁部である。口径25.3cm復元でき、残存高2.8cmを測る。口縁端部は少しつまみ上げ、強いナデによって断面台形状になり、面を持つ。

図15－35は機械掘削時に出土した瓦質土器擂鉢である。口径38.8cm、残存高6.5cmを測り、胎土は粗く1mm以上の石英や角閃石が混じる。内面には粗いヨコナデ後、原体が８本２条もしくは16本１条の擦目を入れている。外面は横方向のケズリのあと斜め方向のケズリを粗く入れる。

図16－36～42はSD－0016より出土した平瓦である。全て破片であり、全体規模は不明である。残存幅は7.4～12.4cm、残存高7.2～11.6cm、厚さは2.0～2.5cmを測る。端部が残存する例も認められ、1.4～1.6cm幅の面取りを施している。凹面には布目を残すほか、37、38、40、41には糸切り痕が認められる。凸面は全て縄目タタキを施している。40にはわずかではあるが糸切りの痕跡が残る。離れ砂は凸面に残されている。

43はSD－0011より出土した平瓦である。残存幅11.4cm、残存高16.4cm、厚さ2.4cmを測る。凹面には布目と糸切り痕を残し、凸面に縄目タタキを施す。

これらの瓦には固く焼き締まり須恵質のものと瓦質で焼き締まっていないものがある。前者は38～41で、それ以外は後者である。

調査地周辺では南に位置する新井・鳥羽遺跡でも大量の瓦が出土している。中には「承元3年（1209）」銘の瓦も認められる。両者の瓦は調整などが同じであり、同一の建物に関わるものと考えられる。いずれも溝や土坑などから出土しており、遠方より流入したものとは考えにくいことから、周囲に13世紀代の寺院が存在する可能性が高い。

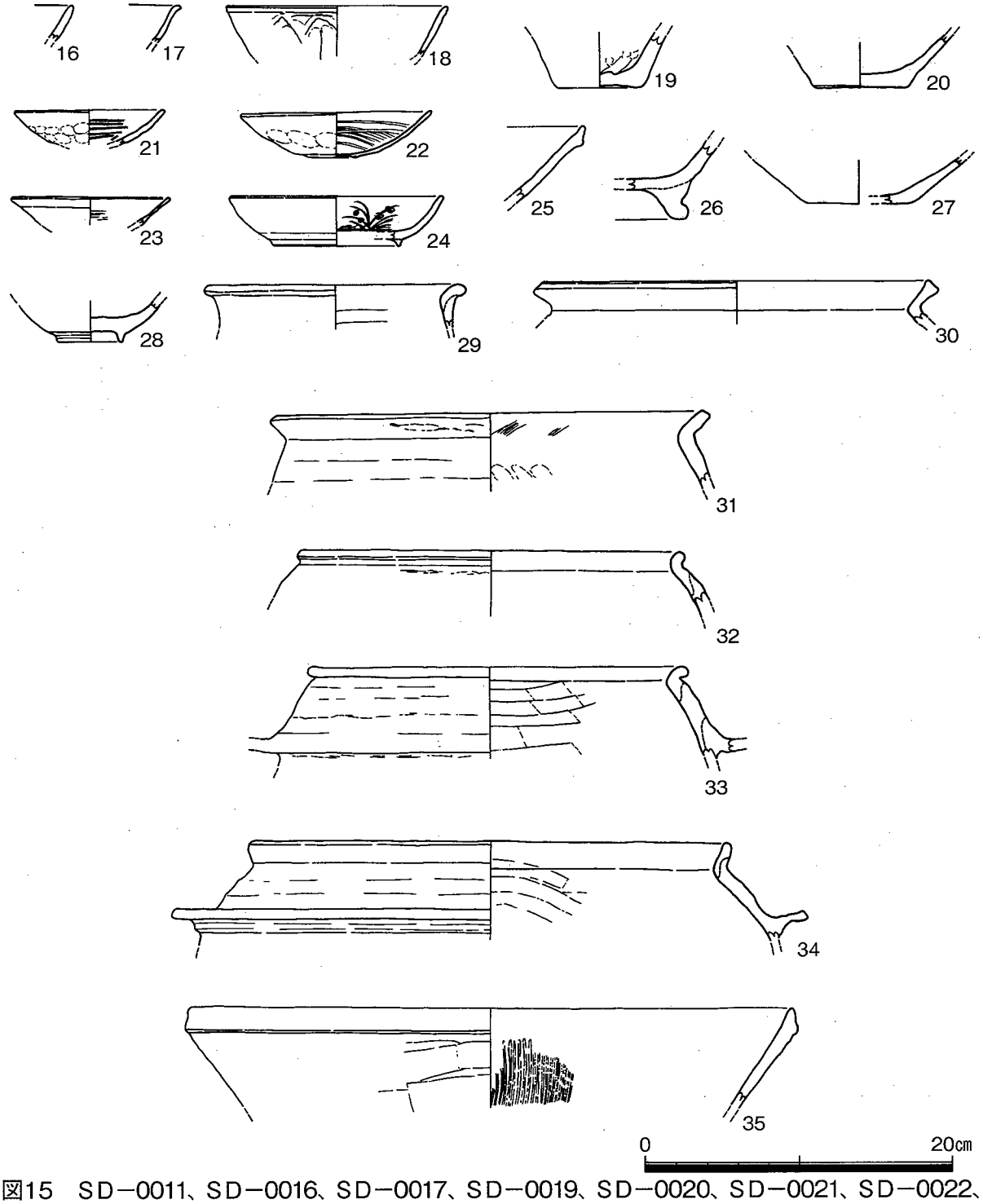


図15　SD－0011、SD－0016、SD－0017、SD－0019、SD－0020、SD－0021、SD－0022、SD－0027、SD－0035、SD－0038、Pit－0044、第3区第3層（35）、表採（18）出土土器

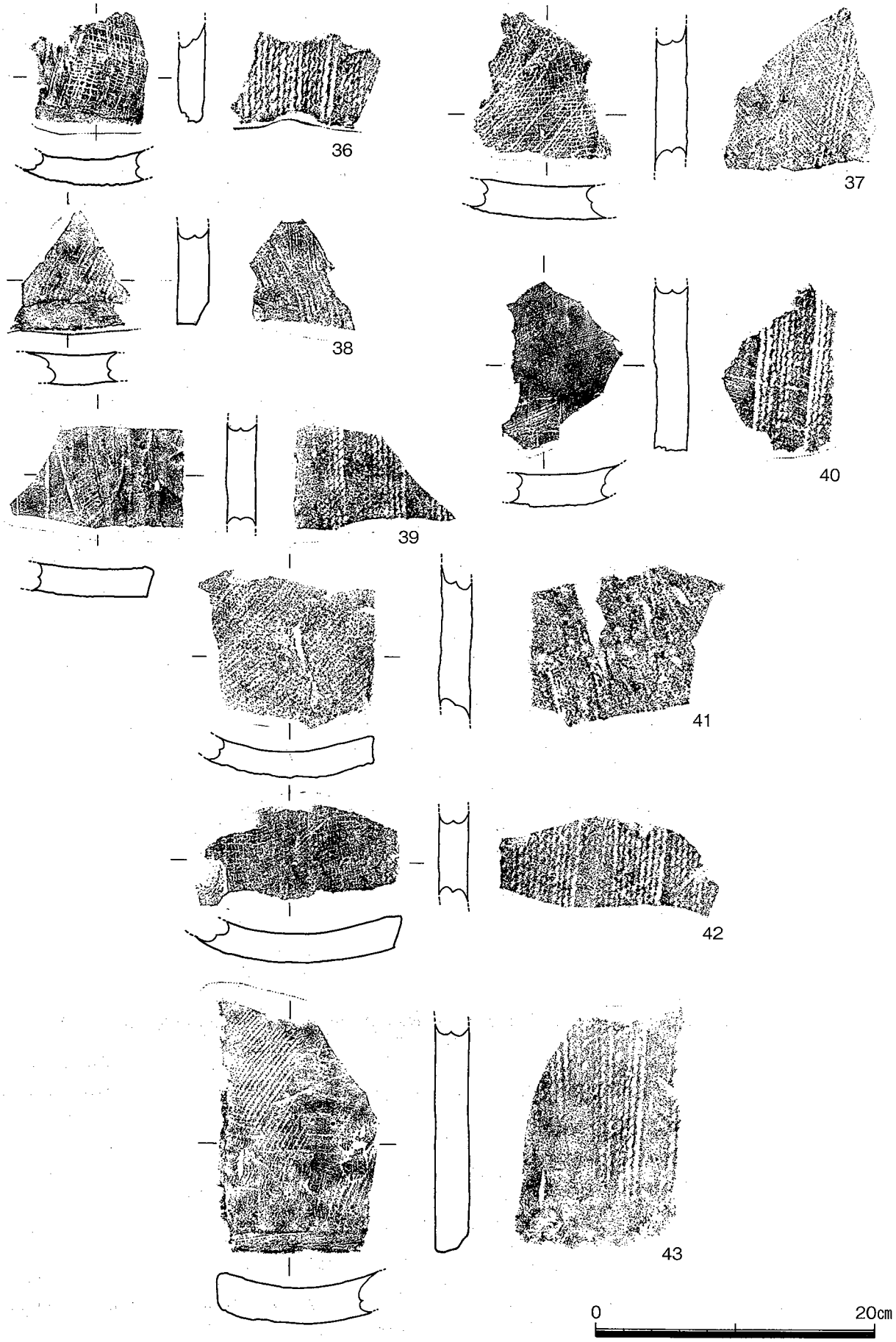


図16　SD－0011、SD－0016出土瓦

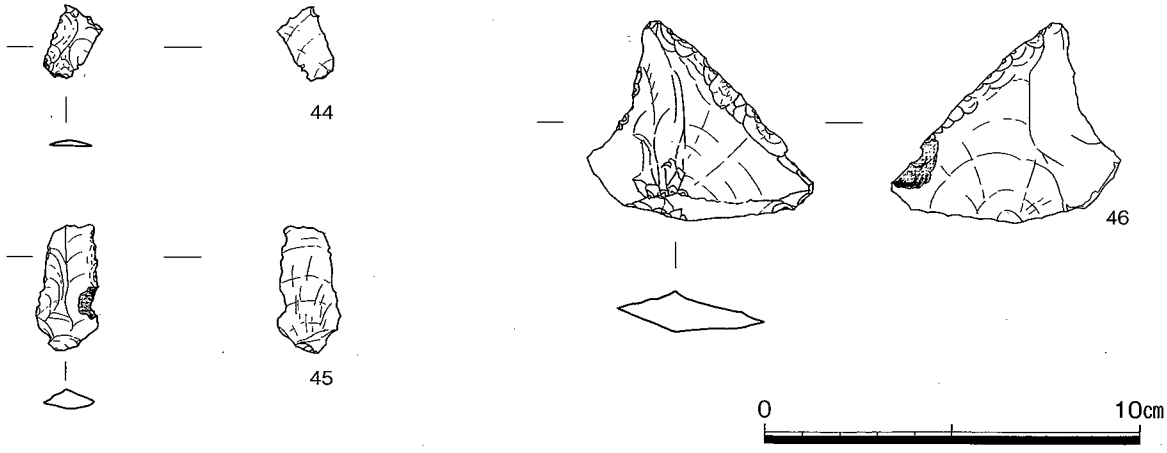


図17　石器

44～46は石器である。いずれも材質はサヌカイトで、44はSD－0027、45、46は機械掘削時に出土した。44、45は剥片で、44が長さ1.85cm　幅1.05cm、45は長さ3.3cm　幅1.7cmを測る。46は石匙で、長さ5.3cm、幅6.0cmを測る。

註1　勝浦康守「貝塚市出土の瓦器編年試案」
貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告第13集『王子遺跡発掘調査概報Ⅱ』　貝塚市教育委員会　1986.3

第４章　まとめ

工場基礎等による破壊部分が存在するものの第１区～第３区全調査区ともに良好に遺構を検出することができた。以下、各時代の状況についてまとめることにする。

中世以前

従前の調査では縄文時代、弥生時代の石器が出土していたが、弥生土器は出土していなかった。今回、流路堆積層から弥生中期の土器が出土しており、本遺跡の東南方向に位置する麻生中下代遺跡、石才南遺跡といった弥生時代の集落跡から流路が本遺跡方向に流れている可能性があり、弥生時代の集落の一部が確認される可能性がある。

中世

第１区部分はフケ、大フケといった地字があり、流路が埋没する過程で湿地化し、水田として利用されたと考えられる。湿地から水田に利用されるのはこれまでの調査結果より、中世ころからと考えられる。

第２区部分では、直交する区画溝を検出した。また、区画溝に囲まれた部分から柱穴を検出しており、集落域が南側に広がることがあきらかとなった。第１区付近は湿地状態で水田には適するが住居建設には向かない。第２区は第１区に比べて２ｍ近く高い場所であり、集落は比較的地盤のよい部分、第２区以南に展開したと考えられ、現在の半田、新井といった村に固定したと考えられる。

近世

近世には湿地状で耕作には適さなかった場所は改変され、灌漑用水路、池等がつくられて耕作地となったと考えられる。出土した近世の遺物のほとんどは灌漑用水路（ＳＤ－００２２、平成15年度調査ＳＤ－９８）からの出土であり、本調査地は田畑が広がる地域であったと考えられる。

近代

ユニチカ貝塚工場が誘致建設されるまで本調査地周辺は耕作地であったと考えられる。工場建設に伴う造成工事は大規模で広範囲なものであった。谷を埋め、高い地盤を削り取り整地され造成された工場の敷地は163,600㎡におよび本工場が日本の近代産業の一翼を担ったことはいうまでもない。

従前の調査においては、旧河道、流路が広がり、中世以降の地形改変により耕作域が拡大した状況が明らかとなり、平成15年度の調査においては、掘立柱建物３棟を検出し、新井・鳥羽北遺跡の集落の一部が明らかとなった。

第１区では、耕作に伴う遺構を検出した。溝、鋤溝、足跡を検出しており、中世から農地開発、地形改変によって農地が広がっていったと考えられる。

第２、第３区では、集落に伴う区画溝を検出し、掘立柱建物の一部と考えられる柱穴を検出した。

今回の調査では建物を構成する柱穴、集落に伴うと考えられる区画溝を検出しており、南側に集落域が広がることが明らかとなった。また、第３区から第１区方向に約２ｍ、地盤が下がっており、現在の平坦な状況とちがいかなり地形変化に富んでいたことが判明した。

出土遺物について

今回の調査においては自然流路より弥生土器が多く出土した。破片が多く全体像を確認する資料は限られているものの、いずれも弥生時代中期に位置づけられるものである。器種は甕、広口壺などが確認できる。文様は櫛描文で直線もしくは波状文を施すものである。凹線文は含まない。その形態からⅡ様式までさかのぼると考えられるものからⅣ様式に近いものもあり、いくらか年代幅が認められる。

搬入品については今回認められず、いずれも在地産と考えられる。調整は丁寧に施すものから粗雑なものまで認められる。

貝塚市内では、弥生時代前期に海岸部に近い沢遺跡、沢西遺跡で遺構、遺物を発見しており、集落が営まれていたことがわかっている。

中期には多くの集落が成立し、近木川流域の加治・神前・畠中遺跡、石才南遺跡、津田川流域の土生遺跡、また調査区に近い麻生中下代遺跡で集落が認められる。これらの集落はこの時期に最も大きくなったと考えられ、石才南遺跡、土生遺跡など比較的大規模な集落も認められる。こうした大規模集落のなかには加治・神前・畠中遺跡、石才南遺跡、土生遺跡など規模を縮小しながらも弥生時代後期から古墳時代前期まで存続していたことがわかっている。

今回出土した弥生土器は、中期における活発な集落の動向を示すものである。土器は自然流路からの出土であるにも関わらず摩滅も少ないことから調査区近くに隣接した集落が営まれていた可能性が高い。

前述したとおり、貝塚市清児周辺から半田、麻生中地域を通り調査区付近へは自然河川が存在していたことがわかっている（註★）。おそらくこの自然河川に沿って麻生中下代や調査区で見つかった集落が営まれたものと思われる。

中世の遺物は瓦器椀、瓦質羽釜、土師質羽釜など13世紀代に該当するものが多く、この頃に調査区周辺が開発を受けたことがわかる。これまでの調査では、古墳時代～平安時代までの遺構、遺物が見つかっておらず、集落などが営まれていた可能性は低い。おそらくこれまで検出した多くの自然流路跡が示すように調査区周辺は自然河川の影響を受け、古代までは不安定な土地柄であったためと思われる。

貝塚市では調査地周辺だけでなく、市内全域において13世紀代に近木川の氾濫原や開析谷などを広範囲に、しかも大規模に開発している様子が確認できる（註☆）。このような大規模開発が行われたのは、土木技術の躍進と農地確保によって生産量を上げようとする強い力があったことは想像に難くない。

こうした開発を行った人々については、もう少し市内の中世集落の動向を見極めていく必要があるが、平成15年度と今回の調査で検出した建物跡はこのような問題に解決の手がかりを与えてくれるものであることは間違いない。

註★　前川浩一「中世農地開発と加治・神前・畠中遺跡」『近木郷を考古学する－役所・寺・街道』2002.1
註☆　註★に同じ

報告書抄録	
ふりがな	にいとばきたいせきはっくつちょうさがいよう
書名	新井・鳥羽北遺跡発掘調査概要３
副書名	
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第72集
編著者名	三浦　基、上野裕子
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597-8585　大阪府貝塚市畠中１-17-１　TEL 072-423-2151
発行年月日	西暦2007年９月30日

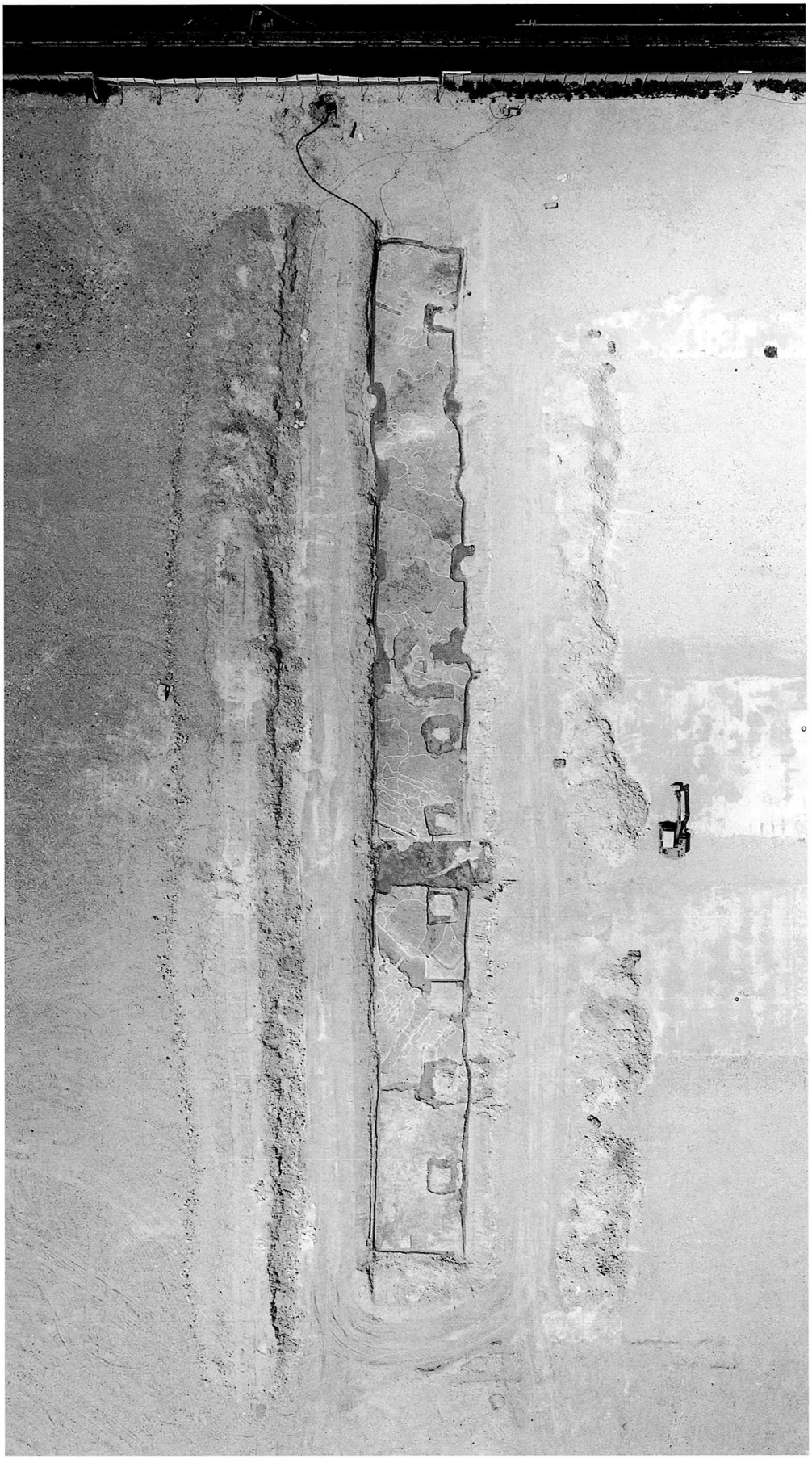
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
地蔵堂遺跡（じぞうどういせき）	大阪府貝塚市（おおさかふかいづかし） 半田（はんだ）	27208		34度 25分	135度 20分		2,400	道路 建設

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新井（にい）・鳥羽北遺跡（とばきたいせき）	集落跡	中世 近世	掘立柱建物 柱穴、溝、土坑	須恵器 瓦器 土師器 陶磁器	

図　　版

第３区全景

図版1　検出遺構



第１区全景

図版2　検出遺構

第2区全景

図版3　検出遺構

1．第1区　　南西より

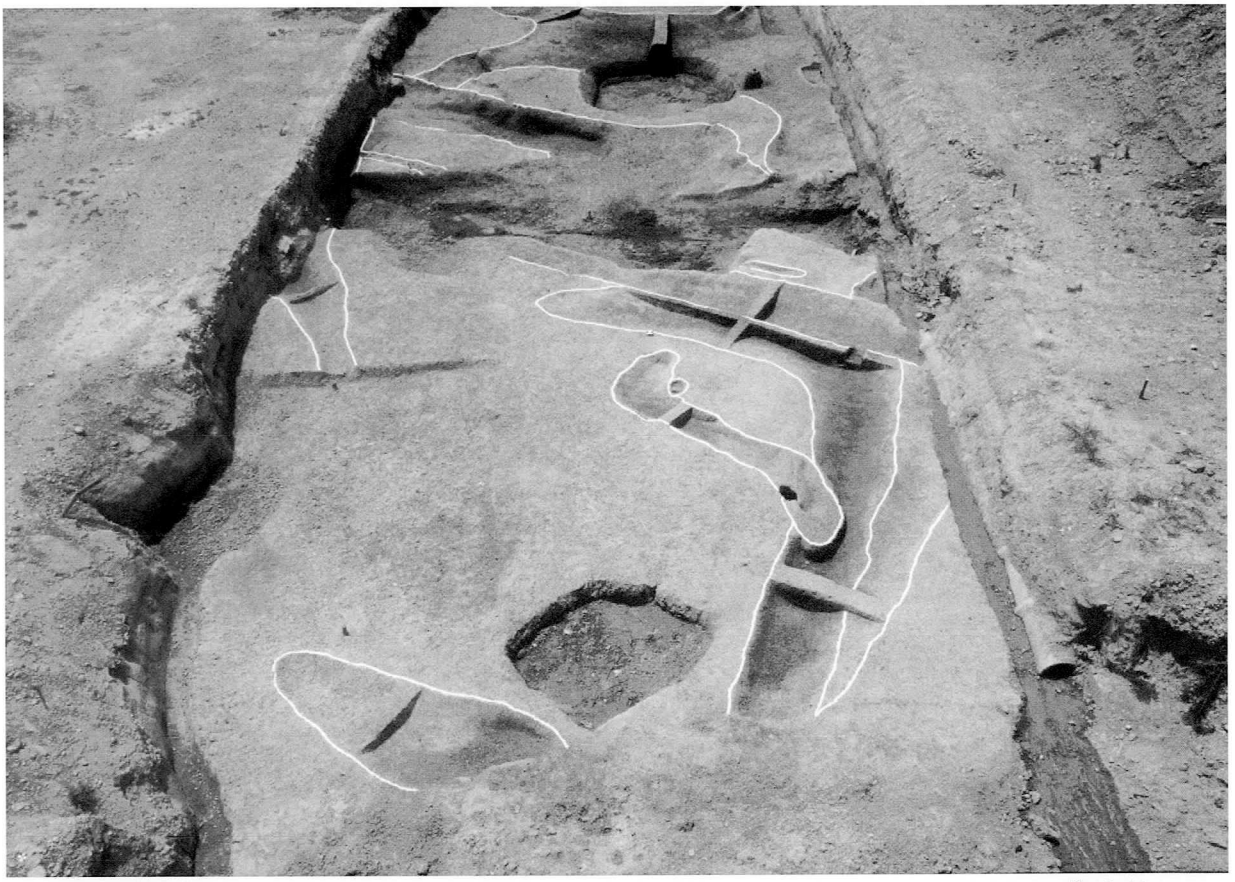
2．第1区　全景　　南西より

図版4　検出遺構

1．第1区

2．第1区　SD-0011　　北西より

図版5　検出遺構



1．第2区　　北より

2．第2区　全景　　北より

図版6　検出遺構

1．第2区　南半　　南西より

2．第2区　SD-0035　　南東より

図版7　検出遺構

1．第２区　SD-0027、SD-0037　　東南より

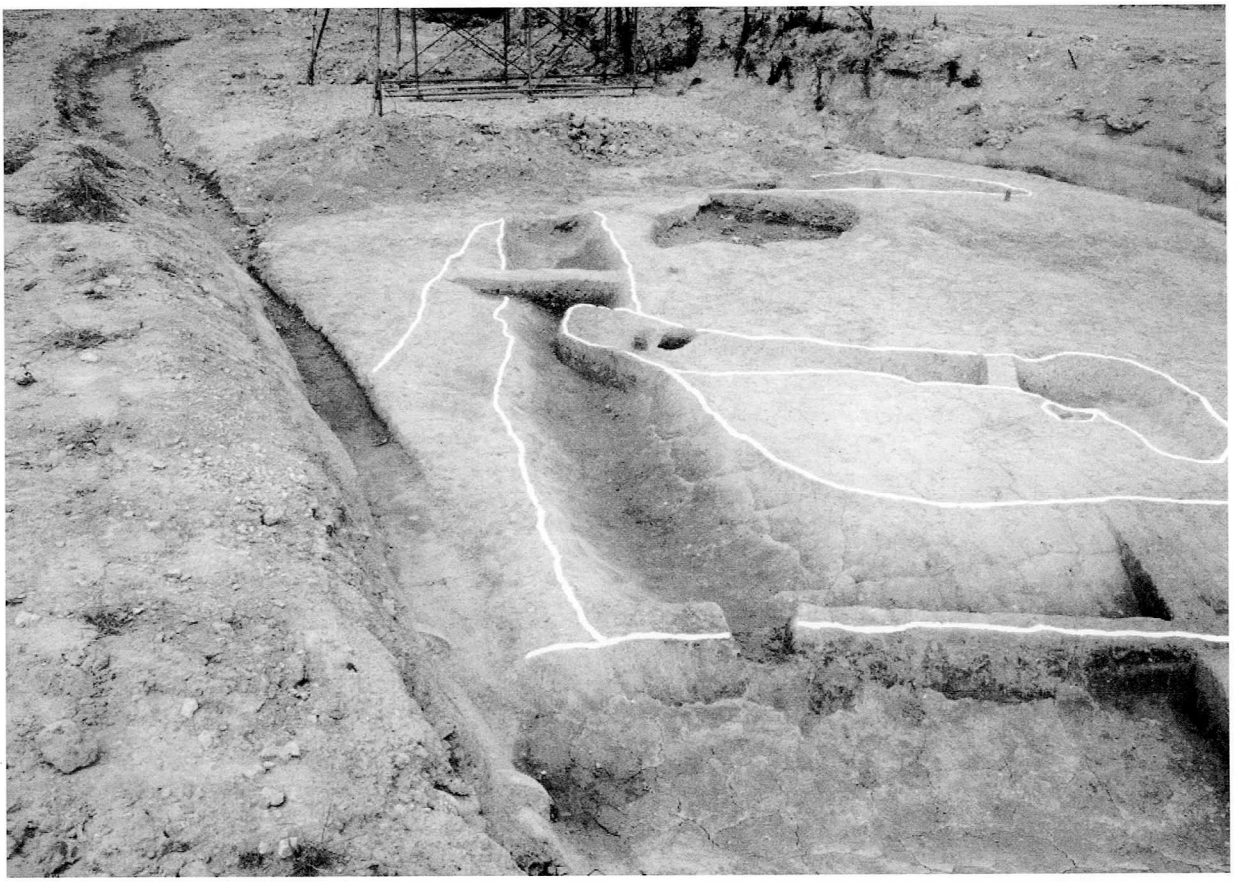
2．第２区　SD-0023　　南より

1．第2区　SD-0033、SD-0034　　南東より

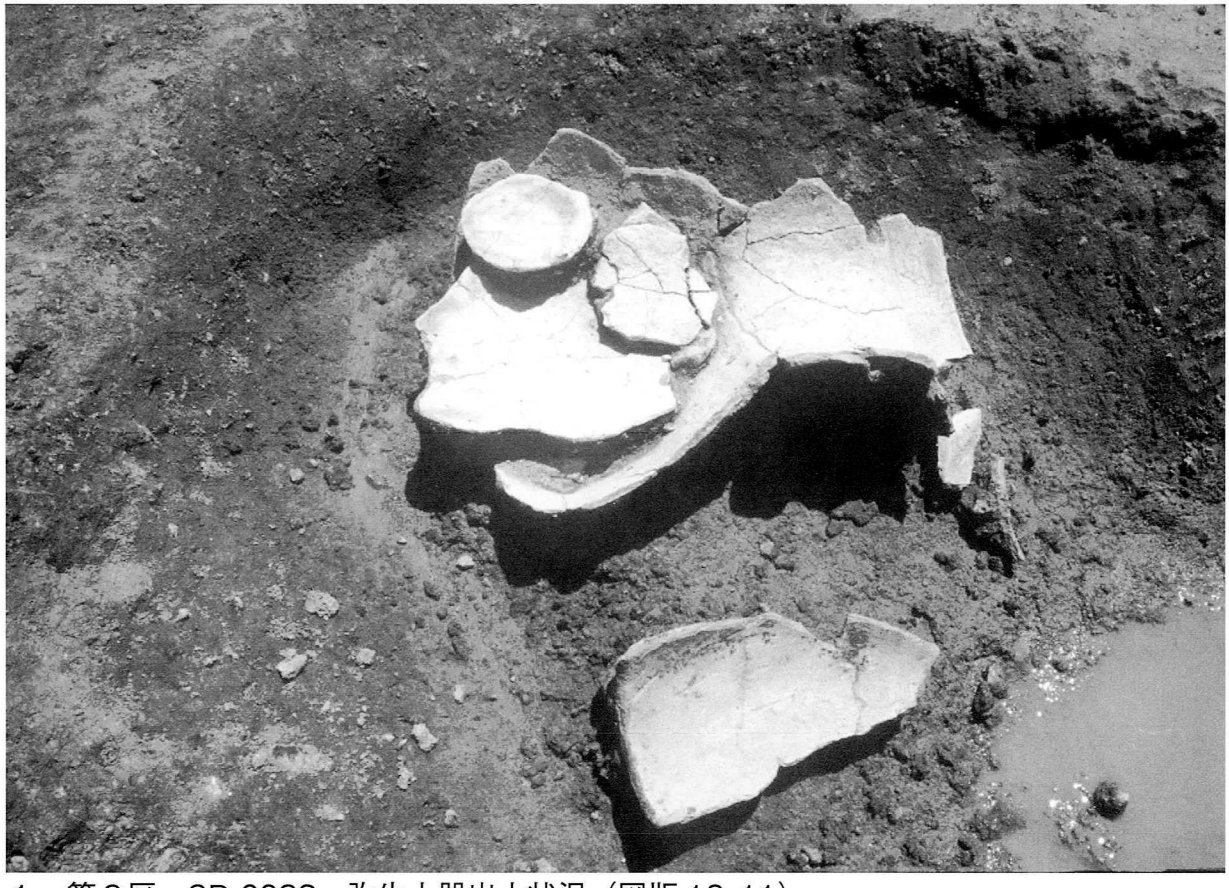
2．第2区　SD-0022　　東南より

図版9　検出遺構

1．第２区　SD-0034、SD-0035、Pit-0043、Pit-0044　　東南より



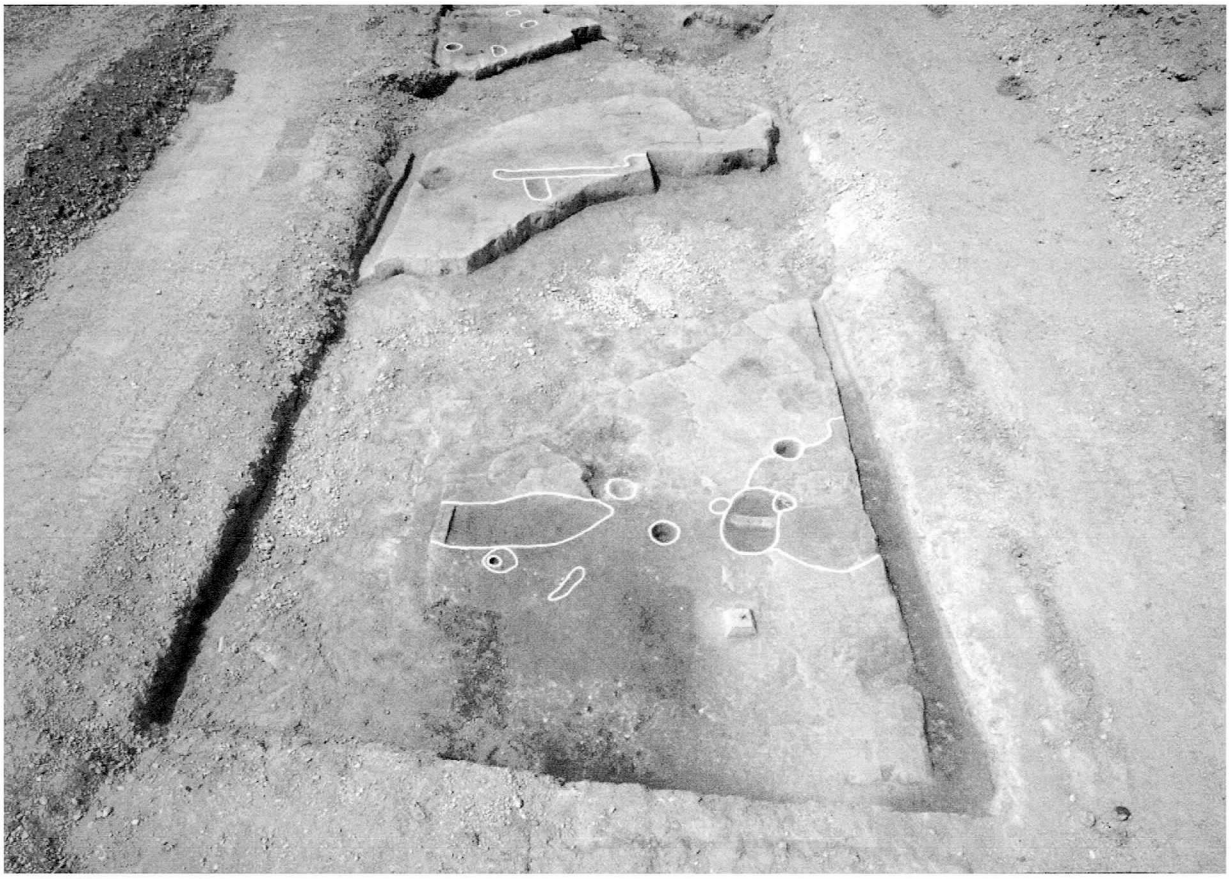
2．第２区　SD-0016～SD-0019　　南西より



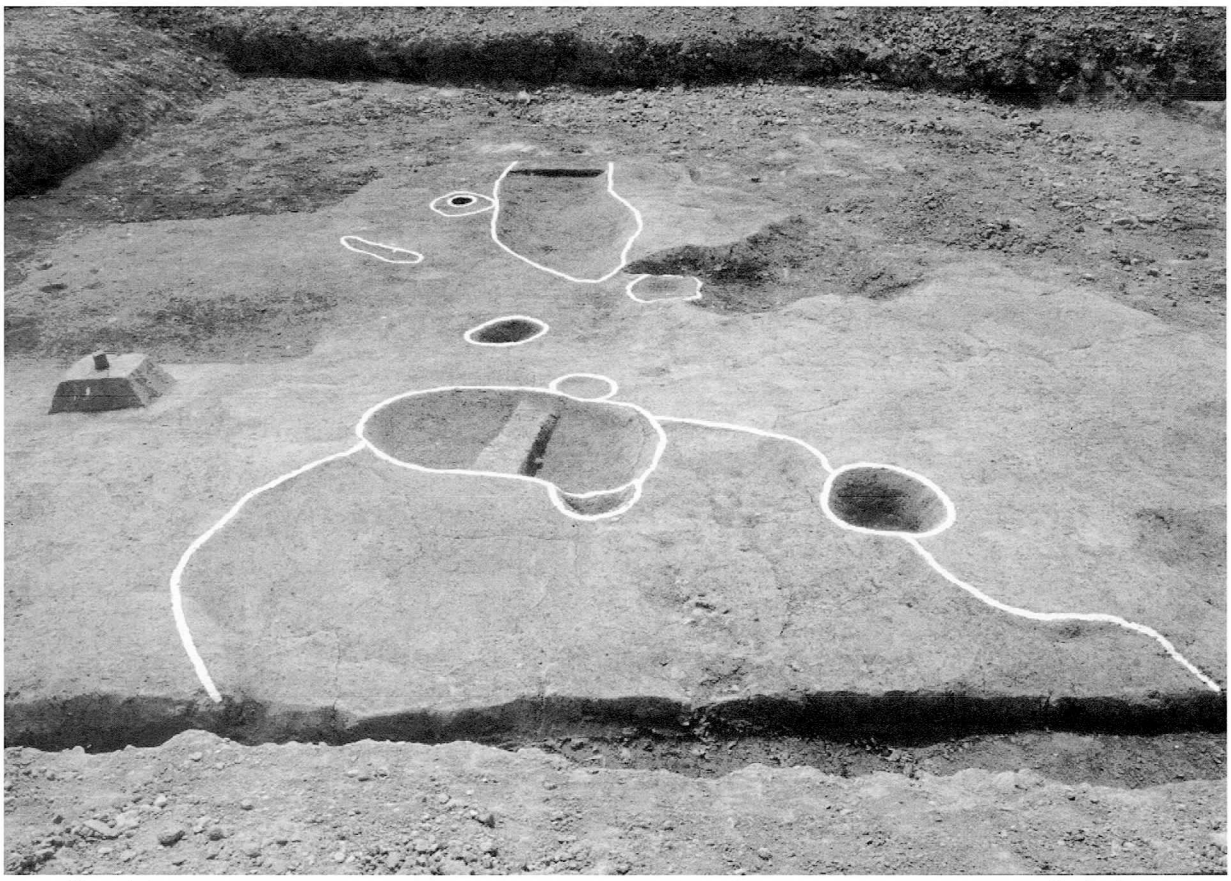
1．第２区　SD-0023　弥生土器出土状況（図版 13-11）

2．第２区　SD-0023　弥生土器出土状況（図版 12-8）

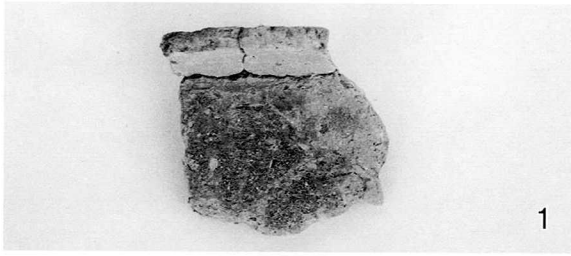
図版11　検出遺構

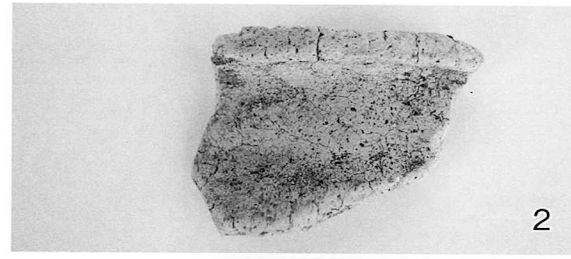


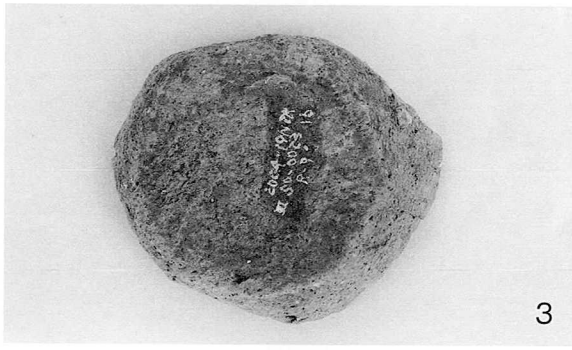
1．第３区　東半　　東より

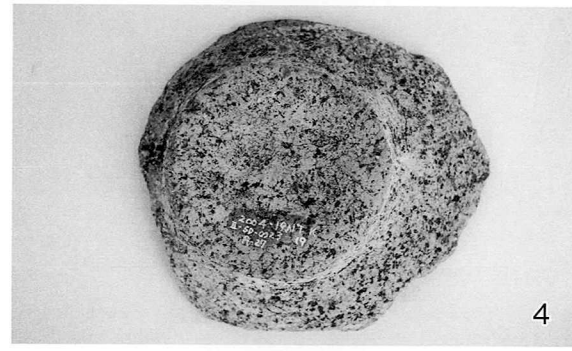


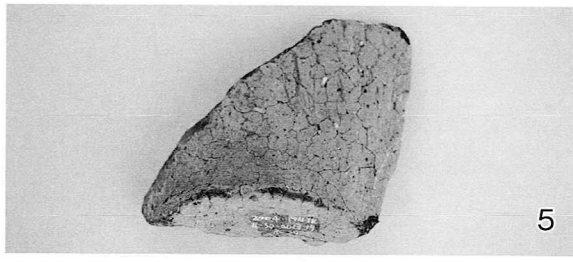
2．第３区　SD-0038、Pit-0039、Pit-0040、SX-0046　　北東より

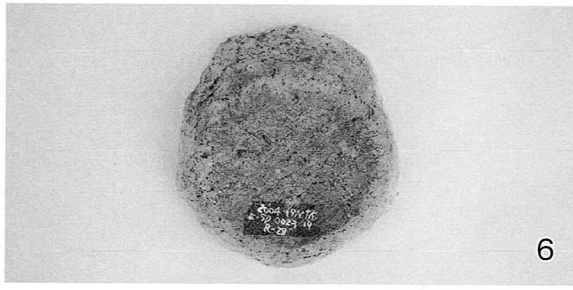


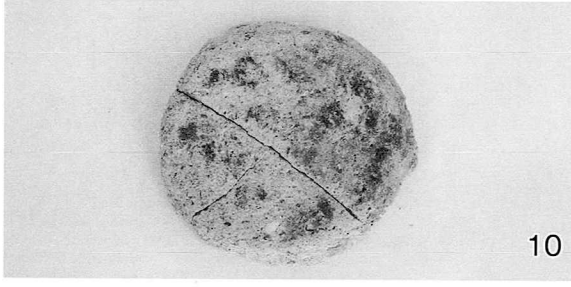


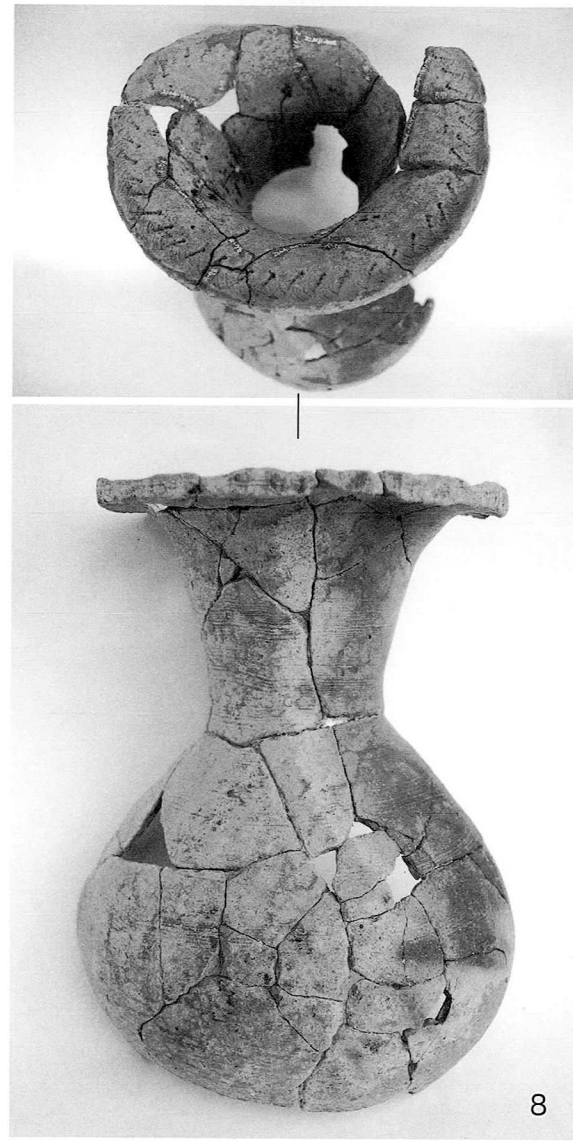






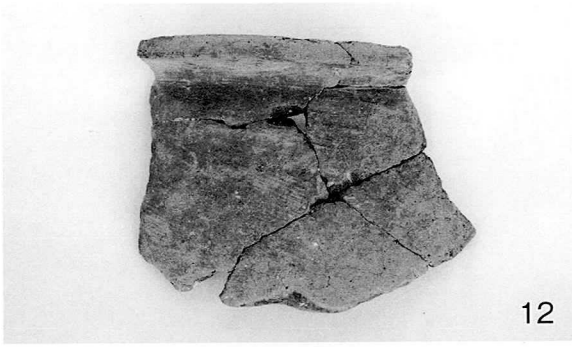


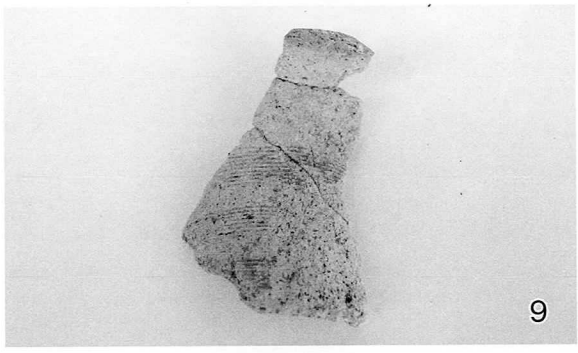


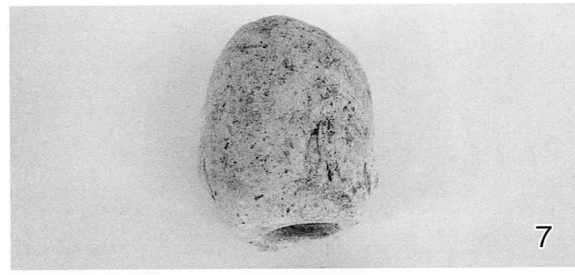


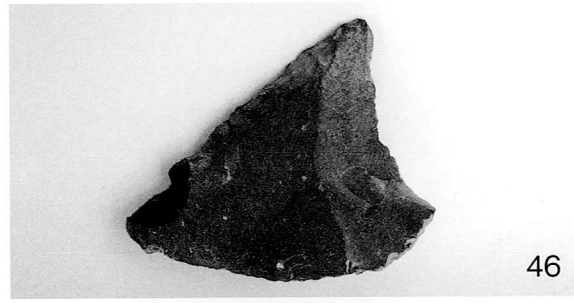
SD-0023（1～6、8、10）、SD-0027（20）出土土器

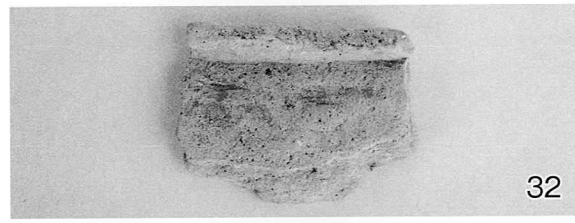
図版13　出土遺物

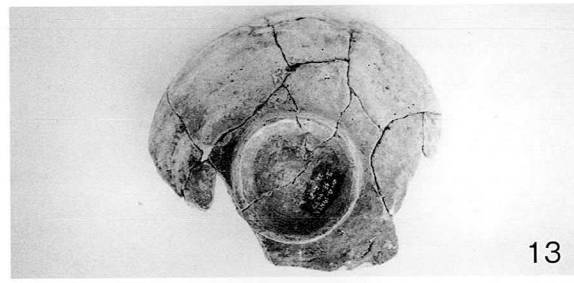


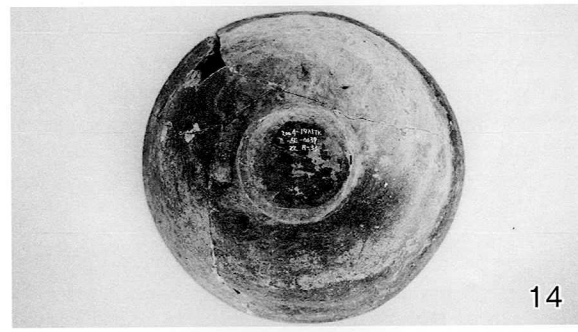


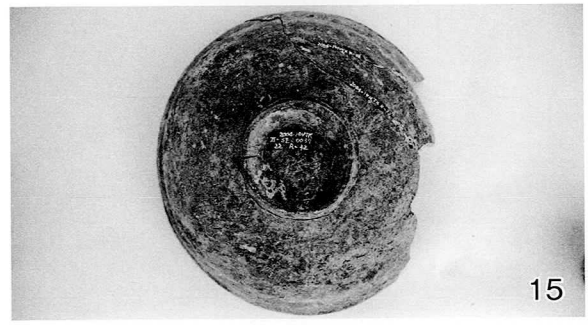




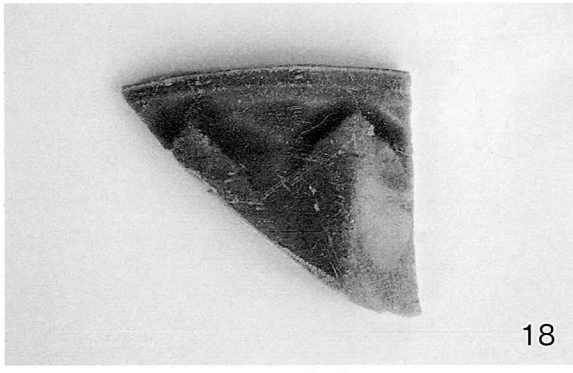


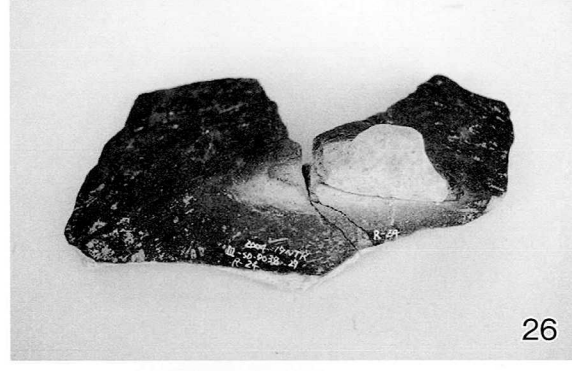


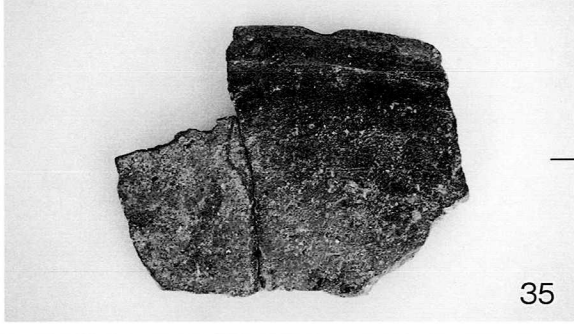


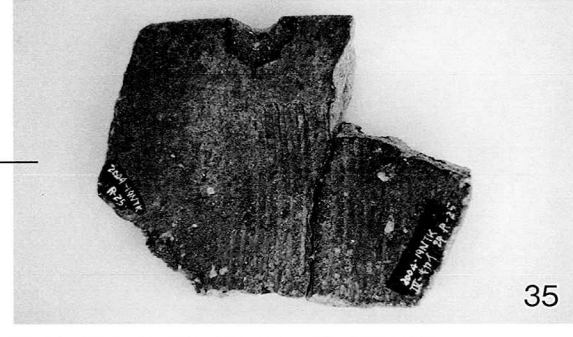


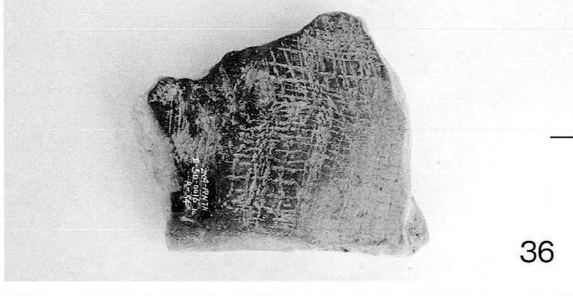
SD-0016 (32)、SD-0020 (19)、SD-0023 (7、9、11、12)、SE-0037 (13～15)、石器 (46)

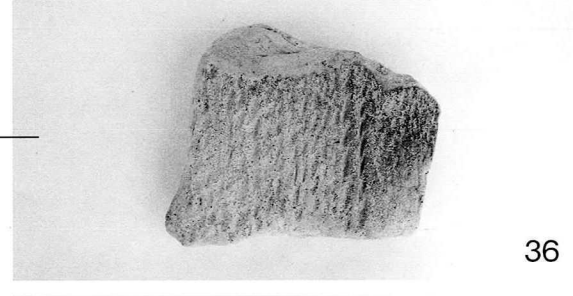


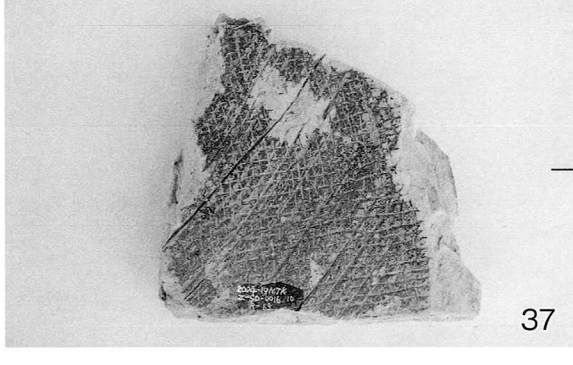


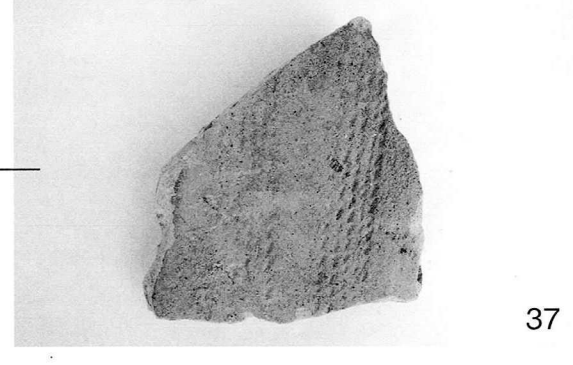




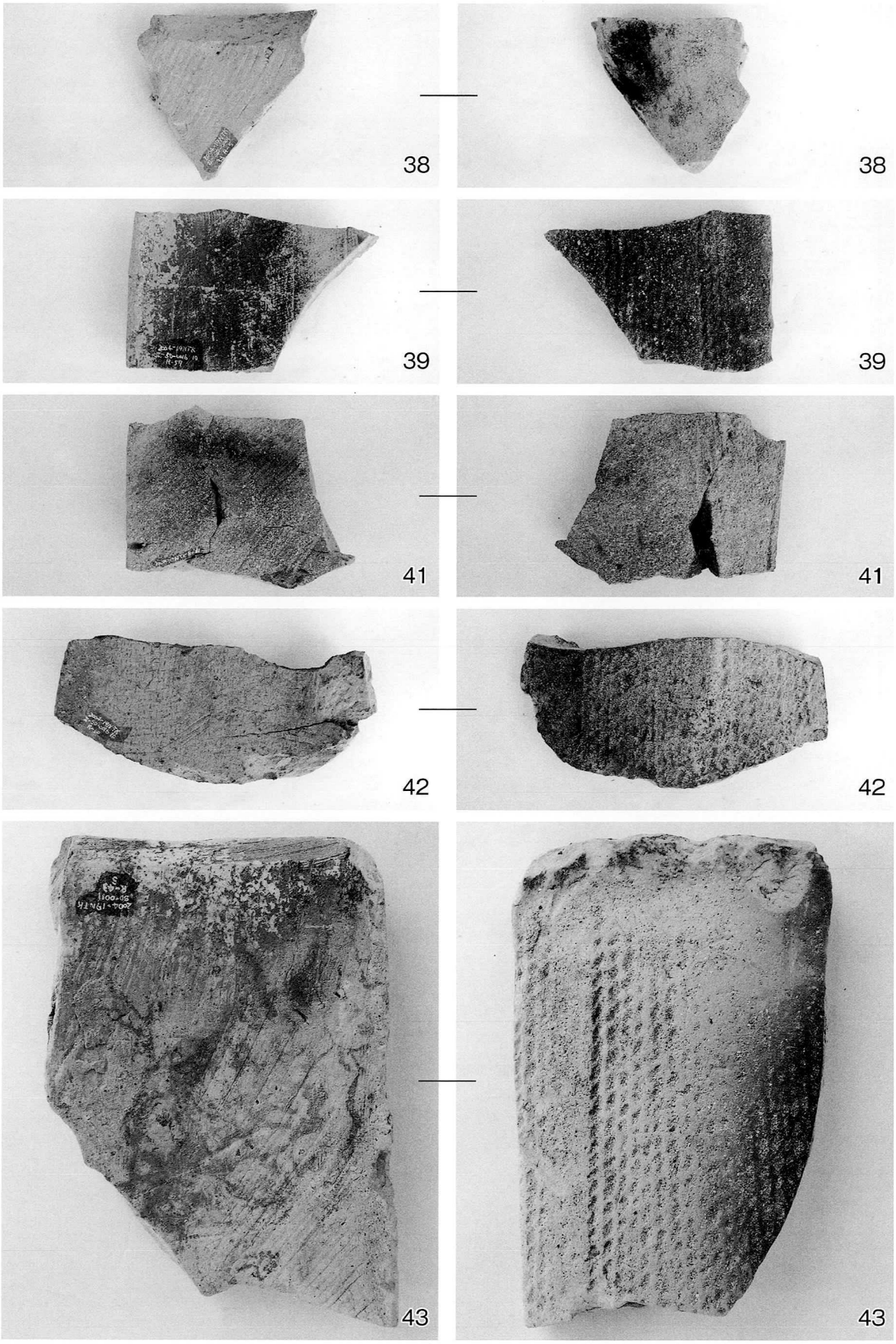








SD-0016（25、33、35、36）、SD-0038（26）、第3区第3層（35）、青磁（18）



SD-0016（38、39、41～43）出土平瓦

貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告　第72集

新井・鳥羽北遺跡発掘調査概要3

発　行　日　　平成19年9月30日
編集・発行　　貝塚市教育委員会
　　大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号
印　　刷　　摂河泉文庫